

5 次元理論

第3巻 認識の原理

滝沢 輝

5次元理論 第3巻 認識の原理 目次

はじめに

第1章 「5次元理論 第2巻 認識の基本構造」 再掲載

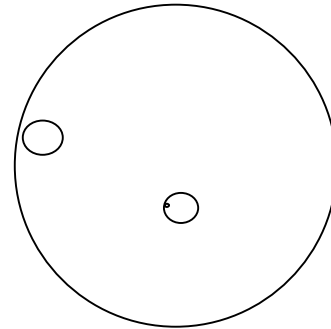
5次元の基本構造
2重円構造
2重球構造
らせん形
らせん形と中心軸の関係は相対的
らせんと中心軸の入れ替えによる球構造
相対性理論の活用
脳内の情報処理
5次元理論 関連図形

第2章 認識の原理

周期関数	多重らせんは 90° の方向転換
フーリエ級数	特殊相対性理論の本質的意味
分離と融合	2重円の連続処理による空間認識
認識とは	認識主体の長さ変更
大小同時認識	電磁波と2重球構造の関連
2重らせん	複素数の物理的構造
指数は方向転換	波と粒子の2面性
空間は光の直線変換結果	2重円中心間の移動方法
主体と客体	2重円は鏡像原理
時間と空間は直行	e と sin、cos の関係
2重円中心間の移動は 90° の回転	2重円中心の 90° 方向転換
5次元は時間と空間の入れ替え	惑星軌道と電子軌道は大小逆転結果
5次元はフラクタル構造	惑星軌道や電子軌道は時間の構造
速さと長さは直交	銀河系と人は大小逆転結果
内側と外側の認識 (2重円構造)	斥力の発見
2方向の意識による認識処理	5次元は内面世界
過去と未来	ブラックホールとホワイトホール
大小逆転の連続処理	
e の物理的構造	
e の認識処理	

はじめに

私達は常に頭を2つ同時に認識しています。
頭部の脳と宇宙大の脳です。全ての存在は認識
処理の結果ですから、脳の内部になるのです。
当然宇宙も脳に含まれることになります。
これを宇宙大の脳と呼んでいるのです。



この状態は、物・粒子（小さな空間）を足し合わせて宇宙が構成されているという従来の物理学の定義では説明不可能です。

点に宇宙が内包されているという定義が物理学に必須なのです。

これはフラクタルを意味します。フラクタルが物理学に必須なのです。

フラクタルが導入されていない物理学は世界を正しく表現できていないため、明らかに間違えています。ですから修正しなければならないのです。

「5次元理論」を著述した理由の1つが上記でした。

その後研究を続けると、従来の物理学の法則が実は認識処理のロジックであることが次々判明しました。

本書ではこの認識処理の原理・原則についての解説を行っています。

本書の発表が人類の向上、および諸問題の解決につながることを願って止みません。

2009年10月

第1章 「5次元理論 第2巻 認識の基本構造」 再掲載

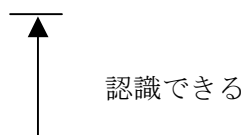
「5次元理論 ～その2」では、5次元の基本について解説しました。この内容は5次元全般に関する基本となるので、第1章として内容を再掲します。

既に内容をご存知の方は、読み飛ばして頂いて結構です。

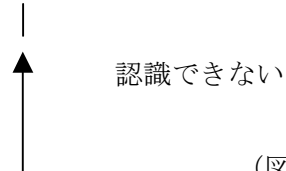
5次元の基本構造

5次元の基本構造について説明します。

認識は常に意識の方向に対して直行する成分で構成されています。(図1)
意識に平行で、厚さが無い存在は認識できません。(図2)

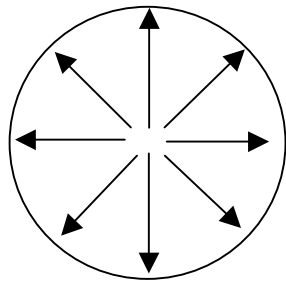


(図1)

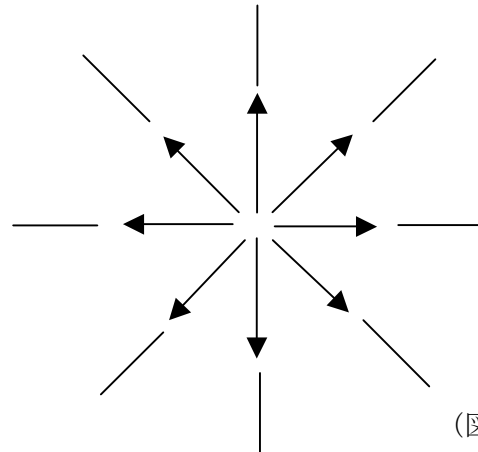


(図2)

自分自身を中心とする円を考えます(図3)。円を認識する際、意識は円の直径方向を向きます。円は意識の方向と直行するので、常に認識可能ということになります。



(図3)



(図4)

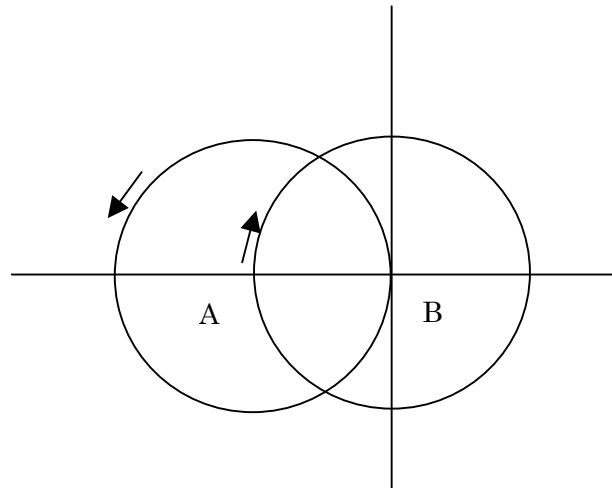
私達が住んでいる世界は、3次元(縦・横・高さ)で構成されていると考えられています。しかし、同時に認識しているのは、意識に対して直行する成分だけなのです。斜めの成分があるかもしれませんが、これは小さく分解して考えればいいのです。意識に対して直行する微小の長さが連続して、斜めの形になっていると考えればいいのです。

この認識対象、意識に対して直行する円の構成要素が90度回転するとどうなると思いま

すか。回転すると、意識の方向に対して平行になります。意識の方向に対して平行になり、厚さがなくなると、認識不可能になります。(図4)

もし、意識の方向に平行の成分だけで構成されている世界がある場合、私達はその世界を認識することができないことは、以上の考察から理解していただけるのではないのでしょうか。

2 重円構造

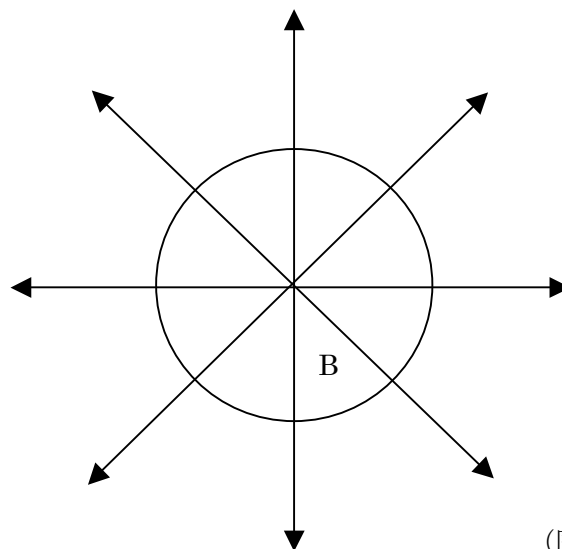


(図5)

同じ大きさの円2個(点A、点Bを中心とする円A、円B)を、一方の中心が他方の円周に接するように並べます。互いの中心が、相手の円周と接する関係は常に持続されます。(図5)

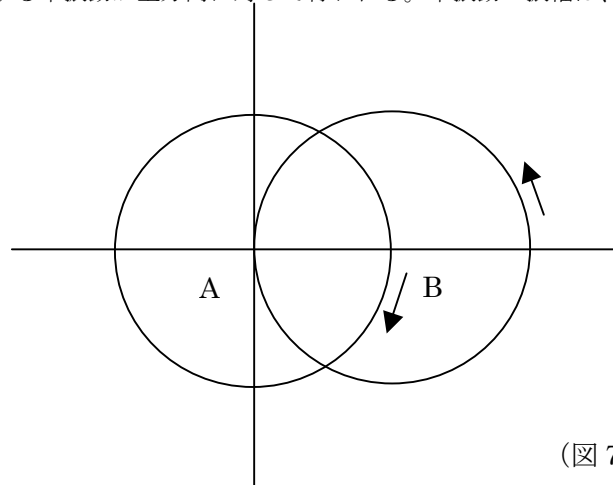
円Aが円Bの周囲を時計回りに回転する場合を考えます。回転角度と同じ角度だけ円Aを逆方向(反時計回り)に自転させます。この関係を持続したまま360度の回転を行うと、円A上の各点は、点Bを中心とする単振動を行います。(図6。振幅は、円の直径に一致)

このように、2円の相互作用により、円運動を単振動に変換することが可能です。



(図6)

上図の矢印の動きは、点 B から見た円 A 上の各点の動きを表している。点 B を中心とする単振動が全方向に対して行われる。単振動の振幅は、円の直径に一致。



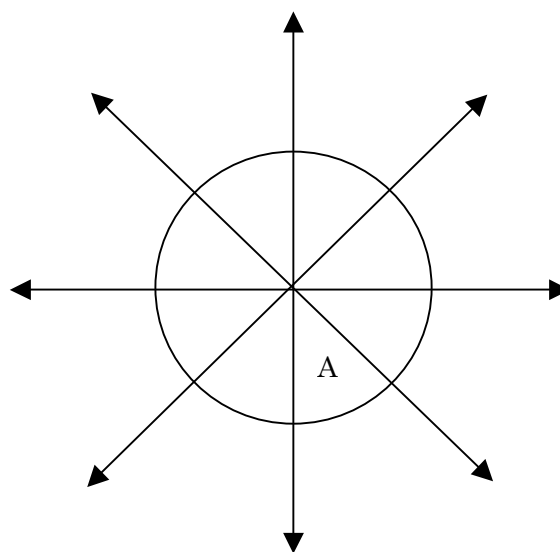
(図 7)

先ほどは、円 A が円 B の周囲を回転する場合を考えました。この運動の見方を変えて、円 A が静止、円 B が回転していると考えことにします。(円 A と円 B の相対的な関係は保たれるとします)

この場合、円 B は円 A の回りを時計回りに公転しながら、反時計回りに自転することになります。(図 7)

(もし見る方向が反転して、このホームページの裏側からこの運動を見るとすれば、回転が逆方向になります。円 B は円 A の回りを反時計回りに公転しながら、時計回りに自転することになります)

この場合、円 B 上の各点は、点 A を中心とする単振動を行います。(図 8)



(図 8)

上図の矢印の動きは、点 A から見た円 B 上の各点の動きを表している。点 B を中心とする単振動が全方向に対して行われる。単振動の振幅は、円の直径に一致。

以上から、円 A 上の各点は、点 B を中心とする単振動を行い、逆に円 B 上の各点は、点 A を中心とする単振動を行うこととなります。

これを冒頭の「5次元の基本構造」と組み合わせて考えます。円 A と円 B の関係は、意識と認識対象の関係になっていることがわかります。互いに円とその直行成分になっているのです。しかも、定点を A とするか B とするかにより、意識と認識対象の関係が互いに入れ替わっているのです。

- ・ 点 A を認識の中心とする ・ ・ 円 A が認識対象の円、円 B が意識の動き（単振動）
- ・ 点 B を認識の中心とする ・ ・ 円 B が認識対象の円、円 A が意識の動き（単振動）

次のように言い換えることもできます。

- ・ 点 A からは円 A は認識可能、円 B 上の点は認識不可。
- ・ 点 B からは円 B は認識可能、円 A 上の点は認識不可。

認識は2種類の意識で構成されています。（「5次元理論」ご参照）

この2種類の意識が2種類の円に該当すると考えられます。

世界を認識する際、意識は空間を自由に動きます。意識が届く範囲が、私たちの世界なのです。

物は、この意識が動く範囲の一部になります。

円と単振動の関係が、ちょうど物と意識の関係に該当します。意識（単振動）のごく一部（円）を物として認識していることとなります。

尚、点 A を認識の中心とする場合と、点 B を中心にする場合では、認識の方向が 180° 逆転します。（5pで（もし～）と説明した内容が、正しいこととなります。）

よって点 A を認識の中心にした場合と、点 B を中心にした場合では、回転が逆になります。

電子が逆回転の2つのペアで構成されている理由はここにあると考えられます。

互いに逆回転のペアの組み合わせで認識像が成立しているのです。この意識の動きのことを、物理学では電子と呼んでいることとなります。

円 A と円 B は不思議な関係になっています。互いに相手の円の動きが、自分の円の単振動になるからです。相手の円の動きが、実は自身の意識になっているのです。

次のように考えることもできます。

- ・点 B から認識可能な円 B が、点 A の意識である。
- ・点 A から認識可能な円 A が、点 B の意識である。
- ・点 A は自身の意識（円 B の単振動）を認識できない。
- ・点 B は自身の意識（円 A の単振動）を認識できない。

点 A が通常意識、点 B が内面の意識（霊的意識）だとします。点 B は点 A の意識である円 B を認識できます。

私達は自身の意識を認識できないと感じていますが、逆方向の意識（霊的意識）では、私達の意識を認識できることとなります（見えている、ということです）。

私達の通常意識が内面世界で認識可能ということは、逆に考えると、私達が認識している通常の世界は、内面世界の意識だということになります。

- ・我々の世界は、内面世界（霊的世界）の意識で構成されていることとなります。

回転により認識（世界）が構成されているにもかかわらず、回転を全く感じないのは、互いに逆方向の回転を足し合わせて認識が成立しているためです。逆回転を足し合わせれば、回転成分はゼロになります。ですから、私達は通常、回転を全く感じないまま生活しているのです。

意識が物に対する直行方向だとすると、全ての物はこの見えない成分でつながっていることとなります。

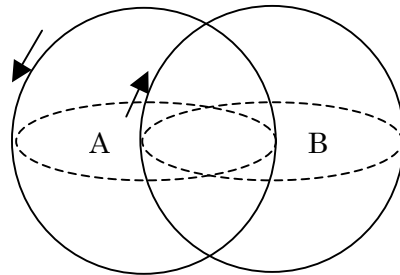
宇宙全体と自分自身もつながっていることとなります。（宇宙と体は、同じ物の別の見方だと考えられます）

この状況を直感的に把握した時、「天上天下唯我独尊」という言葉が誕生したと考えられます。神秘的な言葉も、このように理論的に説明すれば、多くの人々が理解できるのではないのでしょうか。

2重球構造

2重円構造で、認識の基本について説明しました。しかし、この構造では、平面状にしか意識が動かないこととなります。私達は、前後上下左右を全て認識しています。この状況を説明するためには、2重円構造では不十分ということとなります。

この状況を打開するために、2重球構造を考えることにします。



(図9)

同じ大きさの球2個（点A、点Bを中心とする球A、球B）を、一方の中心が他方の球面に接するように配置します。互いの中心が、相手の球面と接する関係は常に持続されます。

(図9)

球Aが球Bの周囲を時計回りに回転する場合を考えます。回転角度と同じ角度だけ球Aを逆方向（反時計回り）に自転させます。この関係を持続したまま360度の回転を行うと、球A上にあり、点Bを通る各点は、点Bを中心とする単振動を行います。（振幅は、球の直径に一致）

この運動では、球A上の円状の部分（点A、点Bを通る軸を含む平面と球Aの交点）のみが、点Bを通る単振動の動きをすることとなります。

球A上の点すべてが点Bまわりの単振動を行うには、球Aを球Bの回りに回転させながら、（点A、点Bを通る）軸の回りに回転させる必要があります。尚、軸の回りの回転は、上図の矢印の回転と比べて、はるかに遅い回転となります。前者の回転数無限大に対して、後者1回転を想定して下さい。そうすると、球A上の各点は全て、点Bを中心とする単振動を行うこととなります。

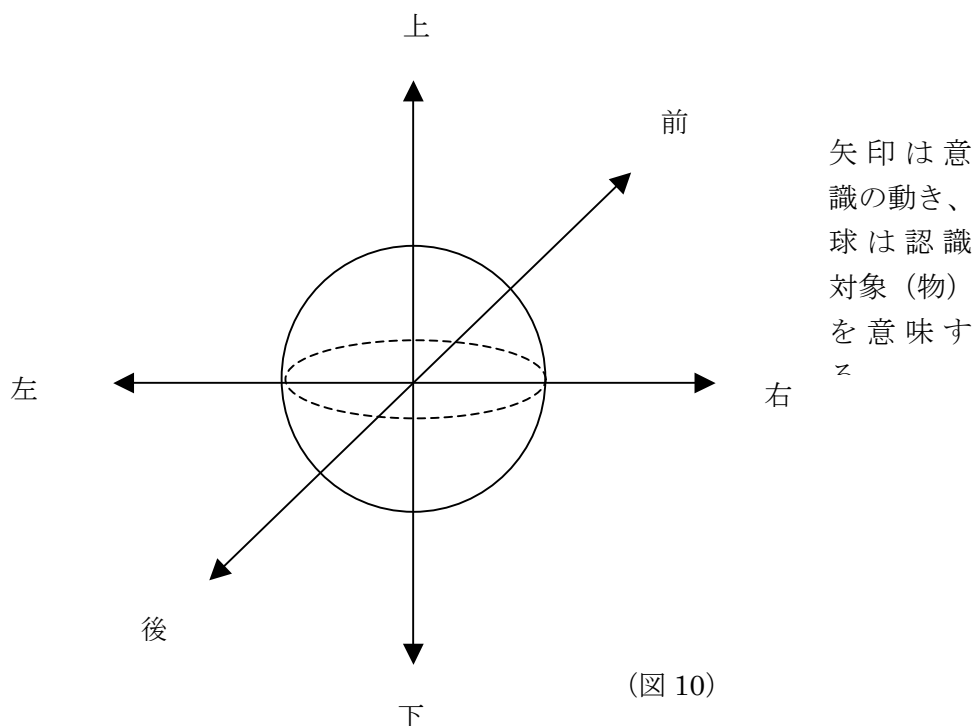
このように、2球の相互作用により、球面の動きを単振動に変換することが可能です。

（以上の説明は、2重円の説明を参照していただければ、分かりやすいと思います）

2重円の運動は、2重球の運動を、ある平面（点A、点Bを通る平面）で切ったときの切り口の形をしています。2重円では、この平面上に運動が限定されるのですが、2重球では、この平面自体の回転も行うことになります。

以上から、2重球構造による回転運動の単振動への変換は、2重円構造による単振動（平面上の振動）を、点A、点Bを通る軸の回りに回転させた状況になることを、ご理解頂けると幸いです。

この状況は、上下左右を認識する私達の認識状況にちょうど符合することになります。認識対象（物）が球、意識（物の前後を移動）が単振動で表現されていることになります。

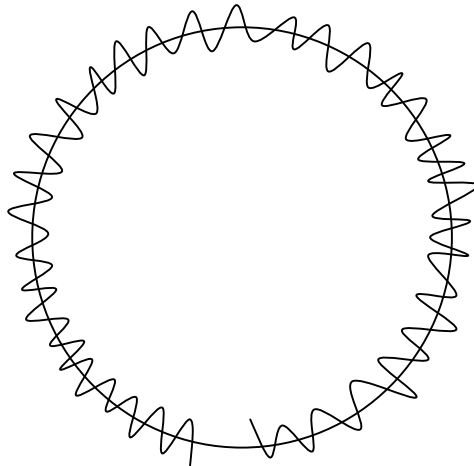


尚、球Aが球Bの回りを回転する場合を説明しましたが、球Aが固定だと考えることも可能です。この場合、球Aと球Bの相対的な関係は維持され则认为ます。そうすると、球B上の各点が、点Aを中心とする単振動を行うことになります。

点Aを中心とする単振動と点Bを中心とする単振動の動きは、足し合わせるとゼロになります。（2重円の説明ご参照）私達が回転を感じないのは、回転成分が打ち消された状況になっているためです。

以上の説明から、2重球構造が、意識の基本構造であることをご理解頂けると幸いです。

らせん形



(図 11)

らせん形も意識の基本構造です。その考え方を説明します。

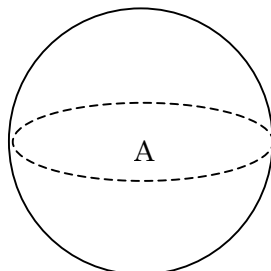
円を中心軸とするらせん形を想定します。(図参照)。

中心軸とらせんの最短距離は、らせん上の全ての点で一定だとします。(図はやや乱れています)

円1周に対してらせんの回転数を無限だとします。そうすると、らせんの1周分の回転成分は、ほぼ円形になります。また、中心軸の円上の点は、らせんの1周分(ほぼ円形)の中心点になります。

ここで、中心軸の円を縮退させて、1点にします(点Aと呼びます)。そうすると、らせんの各回転(ほぼ円形)の中心点が点Aに集約されます。

この時、らせんは点Aを中心とする球形に変換されます。この球上の(元らせんの)動きは、2重球構造で解説した2方向の回転(円方向と軸回りの回転)と同様になります。



らせんの中心軸を1点(A)にすると、らせんは、その点を中心とする球になる

(図 12)

中心軸を縮退させて1点にする理由は、認識像（世界）を生成するためです。

私達の認識は常にある1点を中心に構成されています。ですから、認識結果（世界の構造）を説明する場合には、必ず認識の主体を1点にする必要があるのです。この操作が、らせんと中心軸の関係では、中心軸の縮退という変換になっているのです。中心軸が認識の主体、らせんが認識の客体という関係になっているのです。

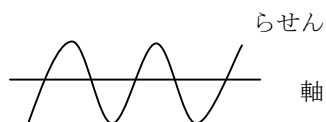
らせん形と中心軸の関係は相対的

先ほどは、らせんの中心軸である円を縮退させることにより、らせんを球の形に変換しました。ここで、らせんと中心軸の関係を見直すことにします。

中心軸（円）上の人がらせんを見ながら中心軸上を移動すると、らせんが周囲を回転しているように見えます。（図 13）

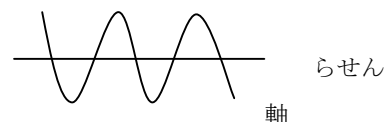
立場を変えます。らせん上の人が中心軸を見ながら、らせん上を移動すると、自身が円形の動きをしていて、中心軸が自身の周囲を回転しているように見えます。（図 14）

つまり、らせんと中心軸に絶対的な立場は無いということです。らせんを中心軸と見なせば、中心軸がらせんになるのです。



中心軸から
らせんを見る

(図 13)



らせんから
中心軸を見る

(図 14)

私達が世界を認識する際、常に自分自身が定点になっています。周囲が自身の回りを動いているように感じているのです。歩いているときには「歩いている」と思っているため、周囲が動いているとは感じないのですが、自身が止まっていると考えれば、周囲が歩く方向と逆に動いていると見なすこともできるのです。

以上から

「認識では、主体となるほうが定点になり、客体が動点になる」

ということを理解していただけるのではないのでしょうか。

この原則から、らせんと中心軸の関係が逆転する場合があることもお分かり頂けると思います。

らせんと中心軸の入れ替えによる球構造

らせんと中心軸（円形）の関係を入れ替えます。

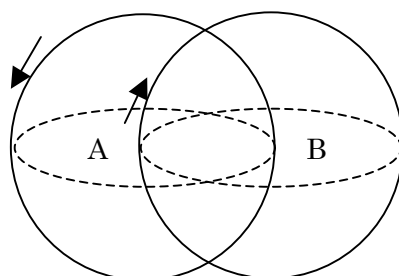
らせん → 中心軸（円形）
中心軸（円形） → らせん

この入れ替えの後、新たな中心軸（円形）を縮退させます。そうすると、新たならせんが球形になります。

先ほどできた球と、今回できた球を合わせて、2種類の球が構成されることとなります。この2種類の球を球A、球Bとします。（図15）

球Bは、球Aの中心で構成されている
球Aは、球Bの中心で構成されている

という関係は、常に成立することになります。
この関係が成立する形状は、以下のようになります。



（図15）

2つのらせん（2つの中心軸）の関係が互いに成立する構造は、実は2重球構造で説明した構造になるのです。

図の矢印方向の回転数（無限大）に対して、点 A、点 B を通る軸の回りの回転数が 1 回という状況は、らせんが無限回の回転で中心軸（円形）を 1 回転するという状況に該当することになります。

以上から、らせん構造と 2 重球構造は、中心軸の縮退という変換を除けば、同じ構造だということがお分かり頂けると思います。

2 重球構造は、意識の基本構造だと説明しました。今までの説明から、らせん構造も意識の基本構造だということをご理解いただけたらと思います。

球 A と球 B は不思議な関係になっています。

球 A ・ ・ ・ らせんが中心軸（球 B 上の点）の縮退により発生した形状

球 B ・ ・ ・ らせんが中心軸（球 A 上の点）の縮退により発生した形状

1. 球 A は、球 B 上の点が 1 点に集約された場合の認識対象（空間）になっています
2. 球 B は、球 A 上の点が 1 点に集約された場合の認識対象（空間）になっています
3. 上記 1 では、球 B 上の点が 1 点になり、球 A に内包されています。
4. 上記 2 では、球 A 上の点が 1 点になり、球 B に内包されています。

上記 3、4 から、球 B と球 A は互いに内包しあう構造になっていることが分かります。要するに、点に空間が内包される構造になっているのです。

世界は、フラクタル構造で構成されていると考えられます。（大小 2 つの脳を同時に認識しているためです）。フラクタルでは、点に空間が内包されます。

以上の説明から、フラクタルの構成原理としての 2 重球構造（らせんの変換構造）の重要性を認識していただけたらと思います。

尚、「5 次元理論」で、らせん構造に関して記述しています。（ご参考）

相対性理論の活用

我々は常に頭部の脳と宇宙大の脳、大小 2 つの脳を同時に認識しています。我々の認識が 2 つの座標系を重ね合わせて構成されていると考えれば、この状況を理論的に説明することが可能です。

特殊相対性理論では、2 つの座標系の相関から、時間や長さが変わることが導かれています。

静止している人が高速で動く物を見ると、長さが短く見えます。また、高速で動く物の時間の進行は、静止している人より遅くなります。

静止している座標系と高速で動く座標系、これら両方の座標系を人が同時に保有していると考え、一つの物が大きさの異なる2つの物として認識できることとなります。

(上記の例) 静止している座標系から高速で動く物を見ると、短く見えます。また、高速で動く座標系から高速で動く物を見ると、静止している状態の長さになります。この両方の認識結果を重ね合わせると、長い物と短い物の2種類の物を同時に認識することが可能なのです。

我々の認識が、このように複数の座標系を重ね合わせて構成されていると考えれば、同じ物を大きさの異なる別々の物として認識できることは理論的に当然ということになります。

尚、特殊相対性理論では速度方向にのみ、長さの変化が発生することになっています。全方向に長さの変化が起こるのは、意識の回転により世界が構成されているためです。回転により、全方向に対して同様の影響が発生していると考えれば、理解可能です。

この場合、意識が高速で動くことが必要条件ということになります。どの程度の速さなのでしょう。

宇宙の大きさを10の26乗メートル、脳の大きさを0.2メートルと考えれば、比は10の27乗程度になります。ローレンツ変換から

$$(1 - (v/c)^2)^{0.5} = 10^{-27} \quad (\text{ } ^2 \text{ は 2 乗 の 意 味 })$$

$$v \doteq c$$

となります。ということは、我々の意識が光速で動いていることとなります。光の本質的な意味が理解できていませんが、以上の考察から、光とは我々の意識そのものだと考えることが妥当ということになります。

意識が光速で動いているため、大きな宇宙が小さな脳の大きさにも見えているのです。

以上から、次の結論を導くことができます。

「宇宙とは人体そのものである」

宗教等では以前から語られていた内容ですが、20世紀までは非科学的だと考えられていた内容です。しかし、ここまでの考察から、科学的、理論的にごく自然な結論だということがご理解いただけだと思います。

大小2つの脳を同時に認識しているということは、世界がフラクタルで構成されているということです。フラクタル構造では、点の中に空間が内包されています。

(「5次元理論」 ご参照)

よって特殊相対性理論は、世界がフラクタル構造で構成されていることを説明する際に必要な理論ということになります。

この場合、座標系を2つに限定する必要はありません。複数の座標系を同時に保有することにより、認識像（世界）が生成されていると考えればいいのです。各座標系が互いに高速で動いていると考えることにより、全ての点が全宇宙空間を内包している構造（フラクタル）を、理論的に説明することが可能なのです。

脳内の情報処理

脳で情報処理が行われた結果が我々の世界（認識）だと考えます。私達は自分の頭部の一点を中心に世界を認識しています。しかし、脳には大きさがあります。脳のいろいろな所で情報処理が行われているにもかかわらず、ある一点に情報が集約されていることになります。

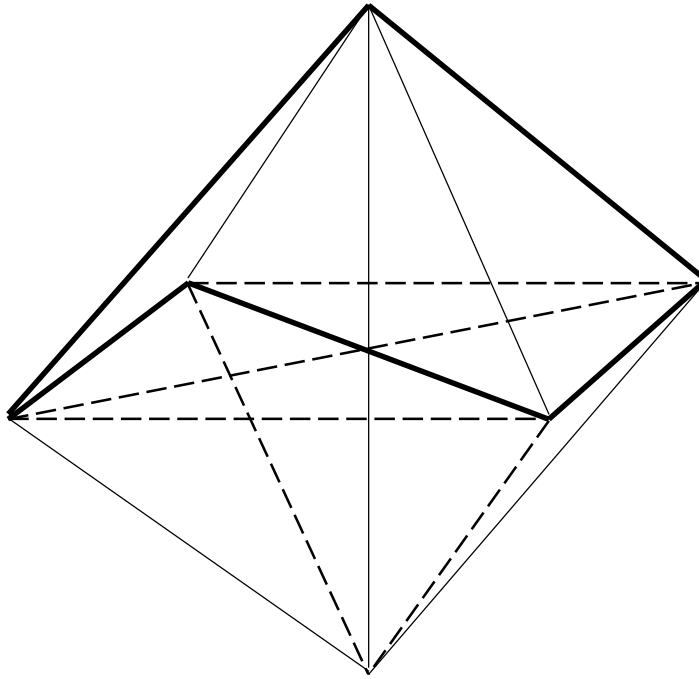
この情報の集約を行う場合、脳内の電流で、情報を一箇所に集約することになります。つまり、脳の一箇所に情報を高速で集めているのです。この際、認識の中心（定点）と高速の情報には、速度差が発生することになります。この速度差からは、特殊相対性理論に基づく大きさの変更等が発生するはずですが、

以上から、私達の世界（認識結果）は、相対性理論による大きさの変化が発生した結果だと考えるのが妥当だということになります。

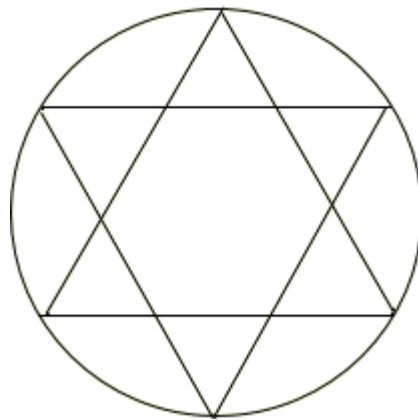
- ・ ・ 相対性理論による大きさの変化の中に私達は生活していることになります。
- ・ ・ 宇宙が体に見えても、不思議ではないことになります。

5次元理論 関連図形

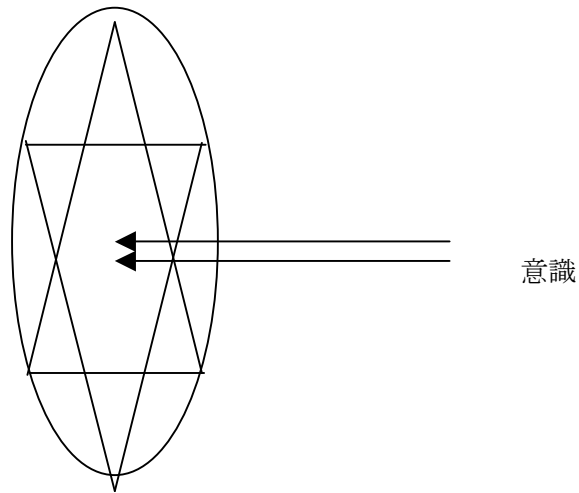
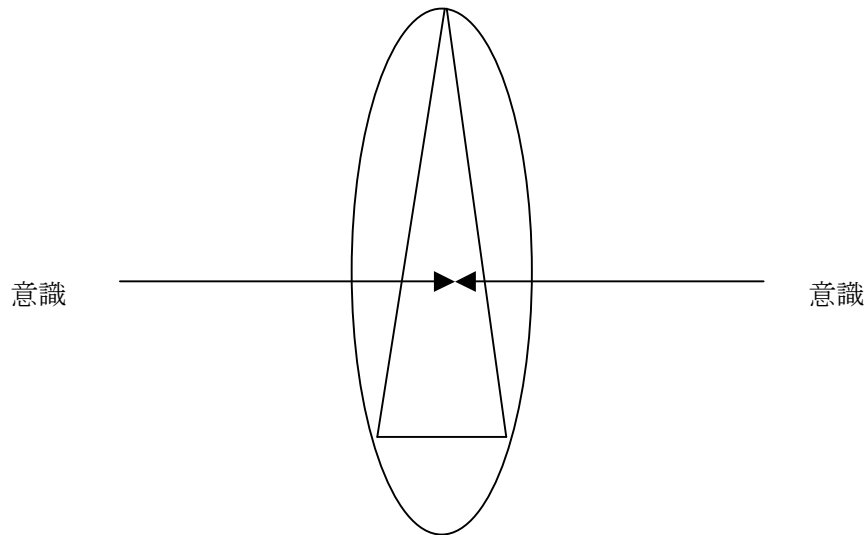
ピラミッド形



六ぼう星

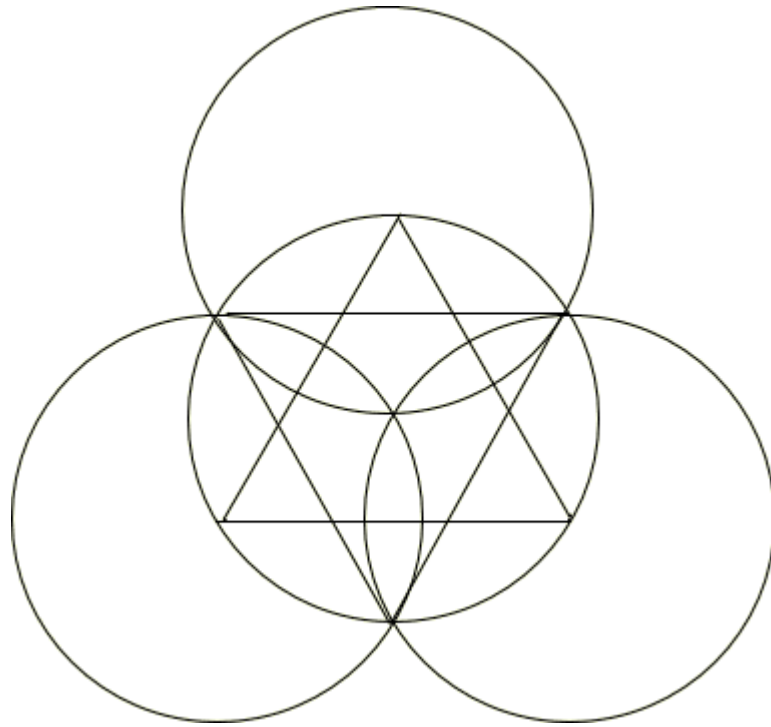


意識の重ね合わせ



我々の認識像は、2方向の意識の交点上に存在している。上図の左側の視線(矢印)を軸の周りに180度回転させた上で、右側に180度反転させる。こうすると、六ぼう星の形になる。この形状が、意識の基本的な形ということになる。一方の意識の方向を i 方向とすれば、他方は $-i$ 方向となる。両者を重ねて認識が成立していることになる。

4重円構造



第2章 認識の原理

世界は認識処理の結果です。世界は形で構成されています。よって、意識に認識の基本となる形が必要です。

第1章では認識の基本となる形、及び認識処理の基本について解説しました。

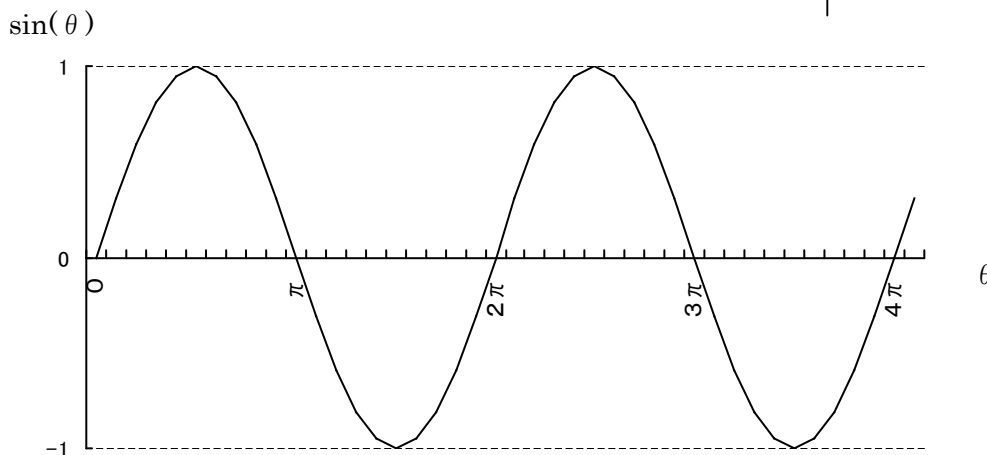
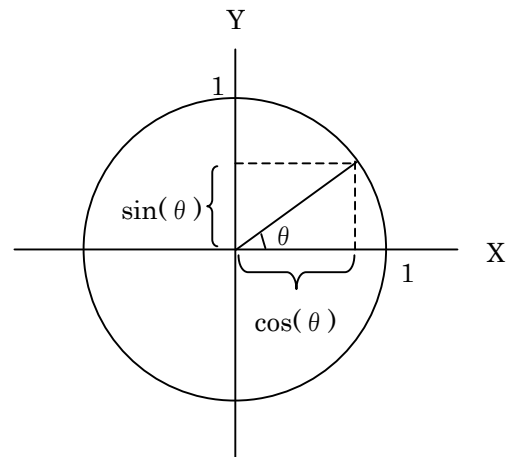
第2章では、第1章では記載していない5次元理論の基本について解説します。

周期関数

三角関数の $\sin(\theta)$ や $\cos(\theta)$ は周期 2π (ラジアン(rad)) (360°) の周期関数です。周期関数とは、 θ の値が 2π だけ異なる点の関数値が全て一致することを意味します。

(図) 三角関数 $\sin(\theta)$ 、 $\cos(\theta)$ の意味

XY 座標の交点を中心とする半径 1 の円で、X 軸方向を回転角 $\theta = 0$ とします。回転角 θ の時、円周上の点の X 座標、Y 座標がそれぞれ $\cos(\theta)$ 、 $\sin(\theta)$ になります。



$\sin(x)$ のグラフ

私たちが生活する世界も周期関数の構造になっています。どこに周期があるかお分かりですか。

右回り(左回り)で1周すると、認識状態が回転前の状態に戻ります。これは、世界が 360°

(2π rad (ラジアン)) の周期関数で構成されていることを意味するのです。

フーリエ級数

ある周期関数を $f(x)$ とします。周期を 2π (rad) とします。
 $f(x)$ は以下のように表現することが可能です。

$$f(x) = \frac{a(0)}{2} + \sum_{n=1}^{\infty} a(n)\cos(nx) + b(n)\sin(nx)$$

$$a(n) = \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} f(x)\cos(nx)dx \quad (n=1,2,3 \dots)$$

$$b(n) = \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} f(x)\sin(nx)dx \quad (n=1,2,3 \dots)$$

このように $f(x)$ を無限の三角関数 (\sin, \cos) の級数和で表現することを、関数 $f(x)$ のフーリエ級数展開と呼びます。

世界は回転周期 2π で構成されています。これは、世界の構造を周期関数で表現することが可能だということを意味しています。これを $g(x)$ (x は回転角度) とします。 $g(x)$ をフーリエ級数展開すると、三角関数の級数和で表現できます。これは、世界の構造を三角関数の和という形で表現できることを意味しているのです。

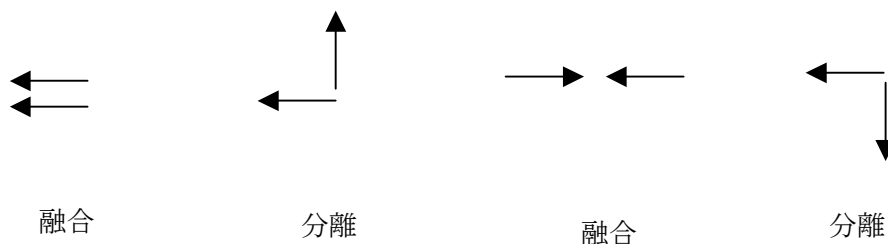
三角関数の重ね合わせと考えることもできます。このように、ある基本形の無限和という形で世界の構造を表現することが可能です。これが5次元理論における世界の構造原理の基本になります。

分離と融合

認識を行うためには、意識の分離が必要です。分離により自身と離れた点の認識が可能になります。

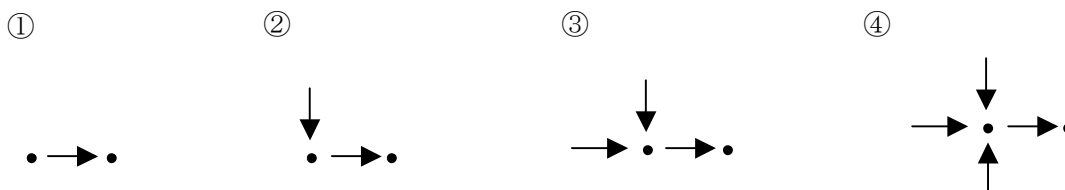
次に、世界 (認識像) を生成するために、分離した意識を一点に融合する必要があります。認識像は自身 (頭部) を点とする球状に構成されています。この認識状態を生成するためには、意識を一点に集約する必要があります。

このように分離・融合が認識に必須の要素なのです。



分離と融合は交互に行われます。
 分離は意識の直交成分（認識対象）をつくります。
 融合は直交成分を無くします。

常に認識処理を認識するためには、 90° ずつの回転が必要になります。
 認識には回転構造が必須なのです。



- ① 認識のため意識が分離します。
- ② ①の意識の動きを認識します。（直角方向から認識します）
- ③ ②の意識の動きを認識します。（直角方向から認識します）
- ④ ③の意識の動きを認識します。（直角方向から認識します）

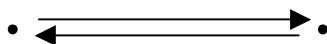
認識処理はこのように回転しながら行われることとなります。認識する意識自体が認識される対象になるのです。

認識とは

認識するとは具体的には何なのでしょう。

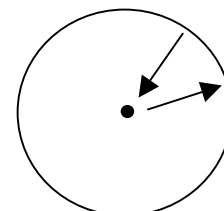
自分、対象という2定点があり、そこを意識が往復した時に対象を認識したと感ずることが出来ます。

意識が対象に向かうことを分離、自分に戻ること融合と呼んでいるのです。



大小同時認識

ある対象を認識する際、逆方向の認識も同時に行います。



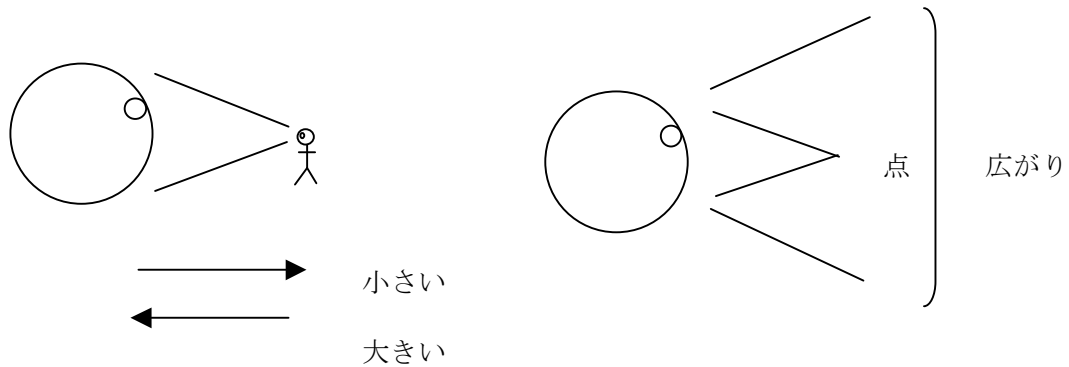
(右図) で、円・点は共に自分自身の意識を意味します。

(1) 円→点 の認識で点を認識します。(大 → 小 の認識)

(2) 点→円 の認識で円を認識します。(小 → 大 の認識)

円・点の組み合わせで、両方向の認識が可能です。

これを全方向の全ての組み合わせで行うことにより、私達の認識は成立しています。

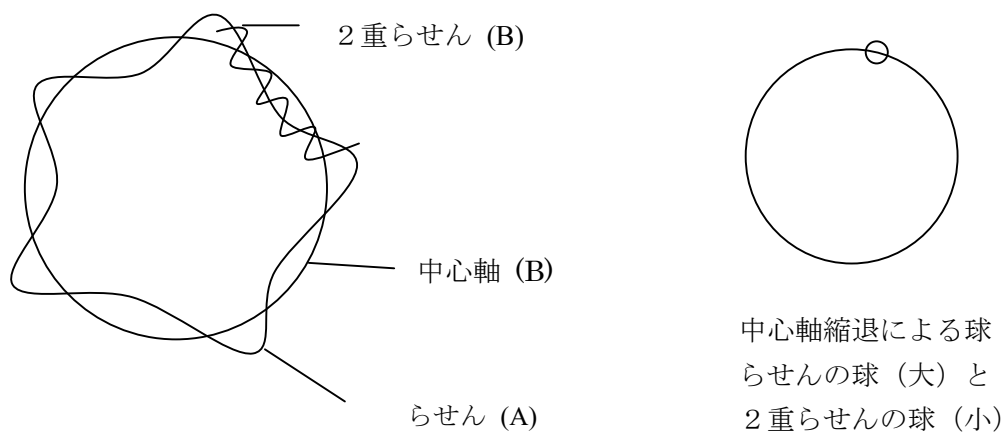


(図左) 意識の方向により大小が逆転します。

(図右) これを組み合わせると、点と広がり認識が生成できます。

同じ大きさに見える場合、遠方のものほど大きくなります。大小逆転でより小さいものに見えることとなります。

2重らせん



(図 2-1)

円を中心軸とするらせん形を想定します。らせんの回転数を n とします。

中心軸の縮退でらせんと中心軸は2重球構造になります。(第1章「2重球構造」ご参照)

中心軸とらせんが入れ替わると、元の中心軸はらせん(A)になり、回転数も元のらせんと同じになります。(図2-1左)

この状態では、中心軸(B)はらせんの回りのらせんとしても存在することになります(2重らせん)。らせん(A)が中心軸の時に、(B)はらせんとして(A)の回りを n 回回転しています。(B)が中心軸になっても、(A)に対するこの関係は変わらないのです。ですから、(A)の回りのらせんとして(2重らせんとして)認識されるのです。

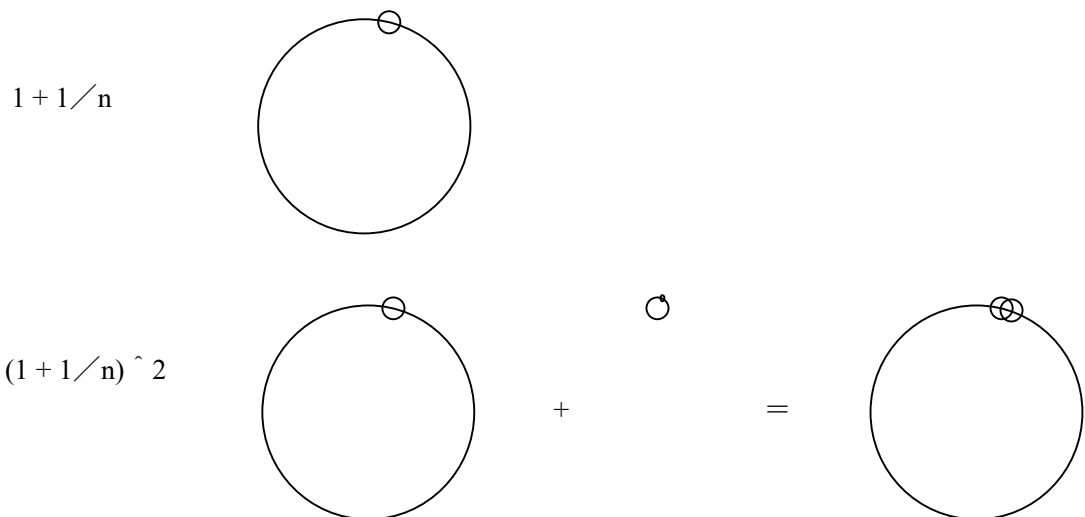
この2重らせんは中心軸の縮退により小さな球になります。

以上の内容をまとめます。

- ・中心軸の縮退で、らせんが球になる。
- ・らせんの縮退で2重らせんが球になる。
- ・らせんと2重らせんの関係(大きさ)は $1 : 1/n$ になる。

(図2-1) らせんの球と2重らせんの球の関係。大きさは $1 : 1/n$ になる。

中心軸とらせんを1回入れ替えると、2重らせんが構成されます。中心軸とらせんの入替を繰り返すと、多重らせんを構成することが可能です。私たちの認識は、このように中心軸の入れ替えによる多重らせん構造で構成されているのです。



(図2-2)

$1 + 1/n$ は大球と小球を意味します。

$(1 + 1/n)^2$ は大球と小球を $1/n$ 倍し、これを元の大円と小円と足し合わせた構造になります。

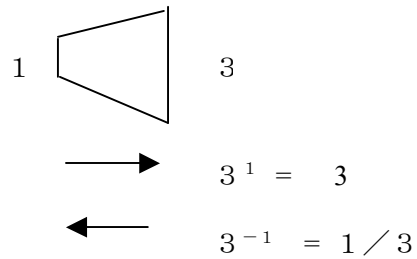
指数は方向転換

右図、縦の長さが1と3の線分があります。

3^1 は左から右の認識を意味します。 3^{-1} は逆方向の認識を意味します。

このように、指数は認識主体、認識客体（対象）間の方向を意味しているのです。

指数1と指数-1では逆方向を意味します。指数-1は指数1に比べて180度の回転を意味しているのです。

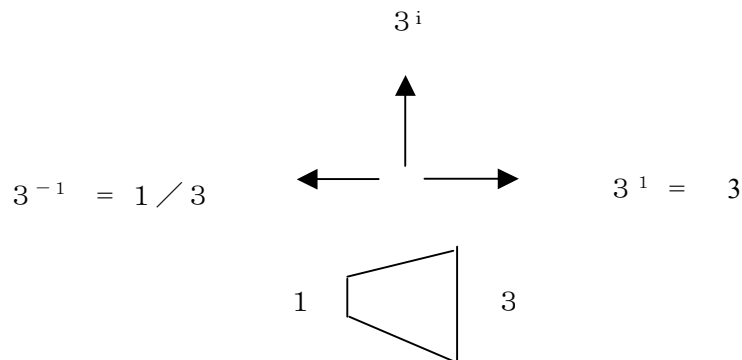


$$i^2 = -1$$

虚数単位 i を2回掛けると -1 になります。指数 i^2 は 180° の回転を意味するのです。指数 i はその半分、 90° の回転を意味することになります。

例えば、 3^i は3の認識に比べて 90° の回転を意味しているのです。

私たちは意識の方向に直交する存在を認識しています。 3^i は 90° の回転なので、認識対象は見えなくなります。この回転が認識像生成に必要なのです。



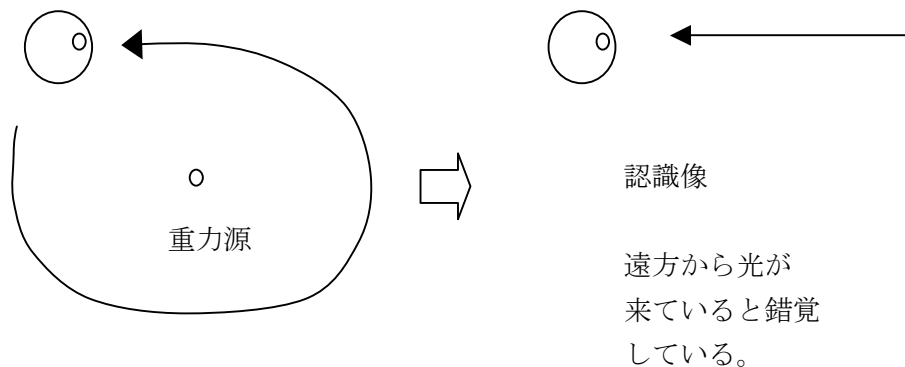
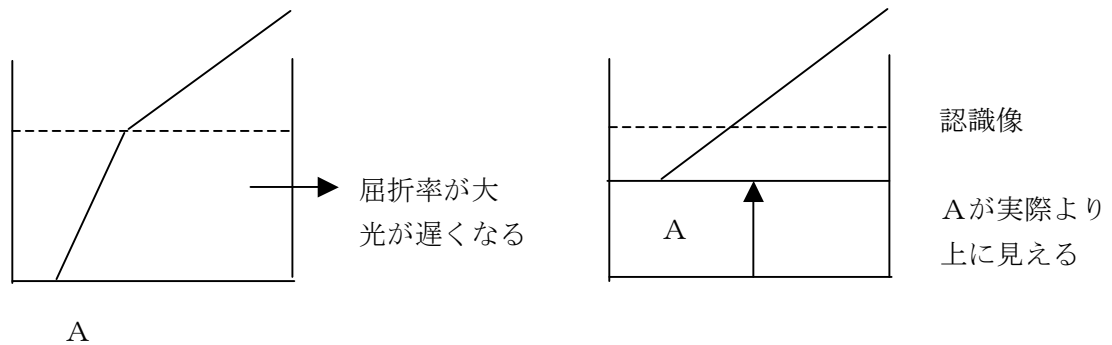
空間は光の直線変換結果

空間は私達が認識により生成した結果です。私たちは目で光を感知して空間を生成します。この際、光は直線状に進行するという前提で空間を生成します。

光が曲がっている場合でも、直線状に変換して空間を生成します。その結果、光の進行経路の形状とは異なる形状の空間を生成することになります。

光が曲がる例として、光が水槽中の水を通る場合を考えます。水は空気よりも屈折率が大きいので、光の速度が遅くなります。その分、水面で光の角度が変わります。その結果、水槽の底面が実際よりも上に見えることになります。これは、光が曲がっていることを無視して空間が生成されることを意味します。

このように私たちは光が直進するという前提で空間を生成します。ですから、認識処理前に光が曲がっている場合、この曲がった形状と私たちが生成する空間には違いが生じるようになります。



光は重力により曲がります。何らかの重力源があると、光はその影響で曲がります。この光を見ると、私たちはその光が直進してきたという前提で空間を生成します。しかし、宇宙には重力源が無数にあるため、光は必ず曲がっているのです。ですから、私たちの空間と認識前の宇宙の構造は全く異なっていると考えるべきなのです。

空間は光を直線状に変換して生成されます。しかし、認識前の光は曲線状です。この相違を正しく理解することが、世界の構造を正確に把握するために必要なのです。

主体と客体

認識には主体と客体が必要です。認識主体は認識する側の意識、認識客体は認識される側の意識です。

光にも主体・客体の分類が必要です。認識客体の光は曲がって見えることがあります（水槽を横から見ると光が曲がっている等）。しかし、認識主体の光は直線変換されるのです（水槽が浅く見える等）。

認識には中心軸とらせんが必要です。中心軸が認識主体、らせんが認識客体に該当します。

多重らせんを生成する場合、中心軸とらせんを入れ替えます。この入れ替えは認識主体と客体を入れ替えることにより実現できるのです。

らせんは認識客体としての形状です。認識主体になると、これが直線であるという前提で認識像が生成されるのです。

認識像（世界）を生成する場合、主体と客体の入れ替えを連続して行います。この場合、認識主体として中心軸かららせん形を認識した情報を、主体と客体の入れ替えによりらせん形から中心軸方向の認識に変換することが可能です。

右図、点A（中心軸の縮退結果）から円B（らせんの縮退結果）を認識します。

これは円Bを点Bとしてその回りを点Aが回転する運動（円A）の認識と相対的に同等の関係になります。

尚、点Aが中心の場合と点Bが定点の場合では円を見る方向が互いに逆向きになります。（手前から見る場合と奥から見る場合）



大小同時認識において 円→点（大→小）の認識が成立するのは、中心から円への認識を、円から中心への認識に変換した結果ということになります。認識主体はあくまで中心なのです。（中心軸とらせんにおける中心軸が認識主体なのです）

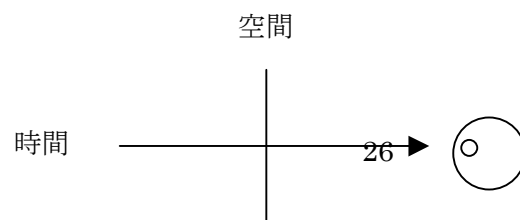
時間と空間は直行

空間は私達が世界を認識した結果です。認識は光を直線状に変換した結果として成立しています。光に対する直交成分を重ね合わせて空間認識を生成しているのです。

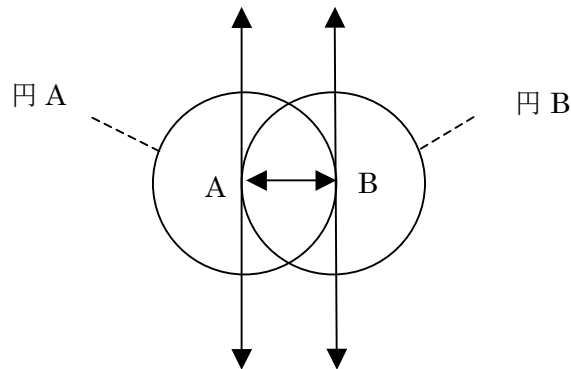
光は時間の経過と共に進行します。この光を元に、私たちの認識像（世界）は成立しています。世界とは私たち自身が認識処理を行った結果なのです。

以上の説明から、時間と空間は直行することが分かります。

拙著「5次元理論」では意識の方向性を意識軸という言葉で説明しました。意識の方向は光の方向になります。ですから意識軸とは時間軸を意味することになります。



2重円中心間の移動は90°の回転



円の中心が互いに相手の円周上にある2つの円を2重円と定義します。

点Aを中心とする円Aと、点Bを中心とする円Bを想定します。

点Aからは円Aの認識が可能です。また、点Bからは円Bの認識が可能です。

(自転・公転により単振動を発生させます。第1章ご参照)

- ・円A上の点：点Bを中心とする単振動により、円Bと直交します。(円A→円Bの認識)
- ・円B上の点：点Aを中心とする単振動により、円Aと直交します。(円B→円Aの認識)

このように、円を認識する意識の方向と認識対象の円は直交します。円A上の点は円Bを認識し、円B上の点は円Aを認識しているのです。

認識主体が2重円の中心の間を動くと、認識対象の円上に移動することになります。

認識主体が点A(円B上)から円Aを認識している場合を考えます。点Aから点Bに移動すると、円A上に移動することになります。移動前の認識対象である円A上の点になるのです。この移動により、円Bを認識することになります。

AB間移動前：円B→円A の認識

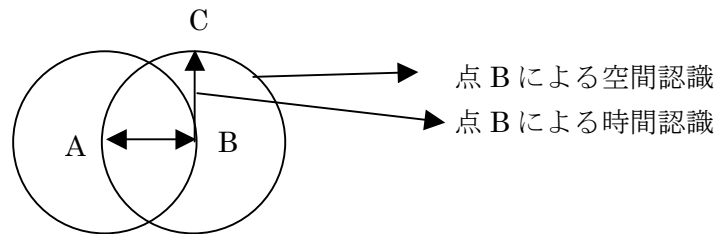
AB間移動後：円A→円B の認識

これは認識主体の中心間の移動により、意識の方向が90°回転することを意味します。

2重円の中心間の移動は、90°の回転を意味するのです。

5次元は時間と空間の入れ替え

認識とは意識の方向に対して直交する成分を把握することです。認識主体の中心間の移動により意識の方向が 90° 回転するということは、認識の主体と客体の関係が入れ替わることを意味します。



点 B から円 B を認識する場合、円 B は空間、BC は時間方向を意味することになります。このように、時間と空間は直行関係にあります。

円 A、円 B による 2 重円構造で、点 A から見た円 A は空間を意味します。点 B から見た円 A は点 B を中心とする単振動になるため、時間を意味することになります。

このように、2 重円の中心間の移動は時間と空間の入れ替えを意味することになります。

2 重円構造では認識主体が中心間を移動することにより、互いに時間・空間の入れ替えを行っているのです。

この時間・空間の入れ替えを 1 つの次元と見なすことが可能です。

本書ではこの次元を 5 次元と定義します。

1 次元～5 次元で世界は構成されることになります。これら 5 つの要素は以下のようになります。

- 1～3 次元 : 縦、横、高さ
- 4 次元 : 時間
- 5 次元 : 時間と空間を入れ替えた世界

現在の物理学では世界の構成要素を空間の基本単位である点（素粒子）として定義しているため、時間と空間を入れ替えるという発想に到達することが不可能になっています。この定義自体が 5 次元発見の妨げになっていたのです。

私たちは頭部の脳と宇宙大の脳、大小 2 つの脳を同時に認識しています。素粒子のみで世界が構成されているという考え方で、この状態を理論的に説明することは不可能です。

世界はフラクタル構造であるという前提が物理学に必須なのです。

5次元はフラクタル構造

世界はフラクタルで構成されています。このフラクタルは認識処理において実現されます。



(上図左) ある点Aから世界全体を認識する場合を考えます。この時、世界は点Aに内包されます。この場合、世界全体を1とします。

(上図右) 次に、別の点に移動して世界全体を認識します。この世界の内、点Aには世界全体が内包されています。点Aの世界は大きさが $1/n$ 倍になります(世界がn点で構成されると仮定)。このとき、世界全体は $1+1/n$ として表現することが可能です。

この状態では、世界全体の中の点Aにさらに世界が内包されています。世界に世界が内包されているのです。これはフラクタル構造を意味します。このように、世界はフラクタルで構成されているのです。

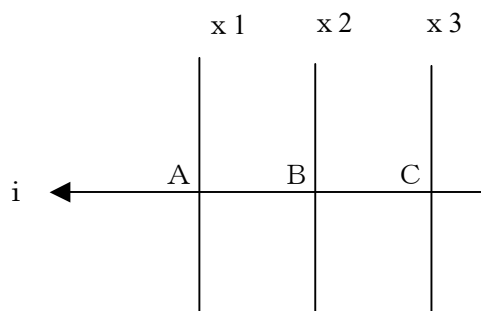
(図 2-3) 複素数について考えます。横軸を虚数、縦軸を実数とします。虚数は意識の方向を意味します(時間軸)。

i 軸上の点Bから実数 x_3 の世界を認識することが可能です。また、点Aから実数 x_2 の世界を認識することも可能です。

点Aには x_2 が含まれます。また、 x_2 上のBには x_3 が含まれます。点A に点B の世界が内包され、点Bの世界には点C が内包されることになるのです。

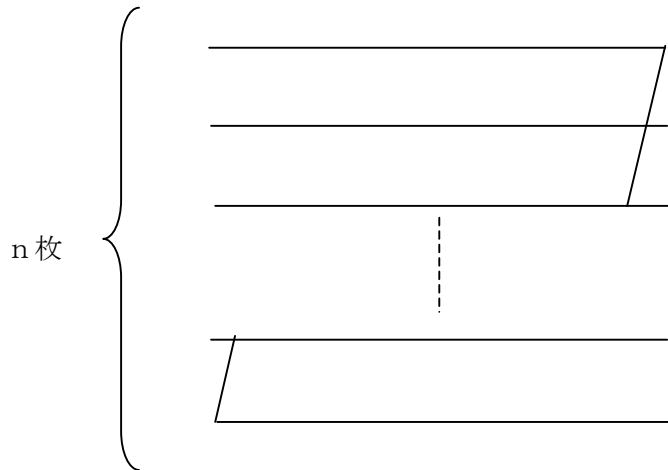
複素数はこのようにフラクタル構造を意味しているのです。

このように時間軸 (i 軸) により実軸をつなぐと、フラクタルを無限に構成することが可能です。

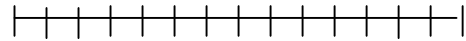


(図 2-3)

意識軸が n 枚の世界を通るとします。
この処理を繰り返すと、全ての点には世界が内包され、その世界の各点にも世界が内包されることになります。

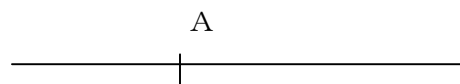
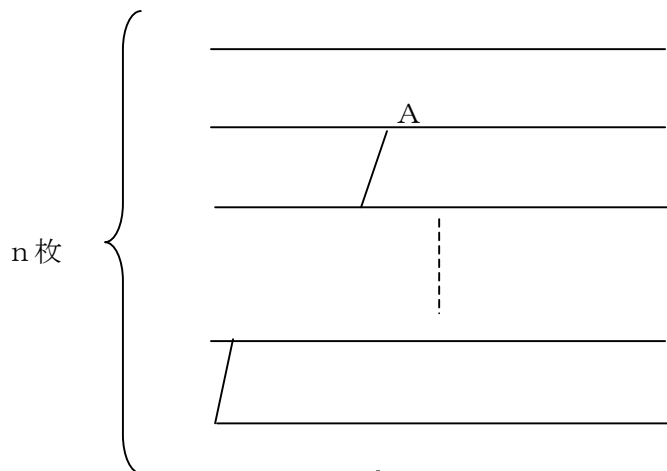


私たちはこれら n 枚の世界を重ね合わせて1つの世界として認識しているのです。



(図 2-4)

Aを認識の中心とします。
実際には n 枚の世界を認識しているのですが、Aという点から1つの世界を認識しているように感じています。
これが私たちの通常の空間認識なのです。

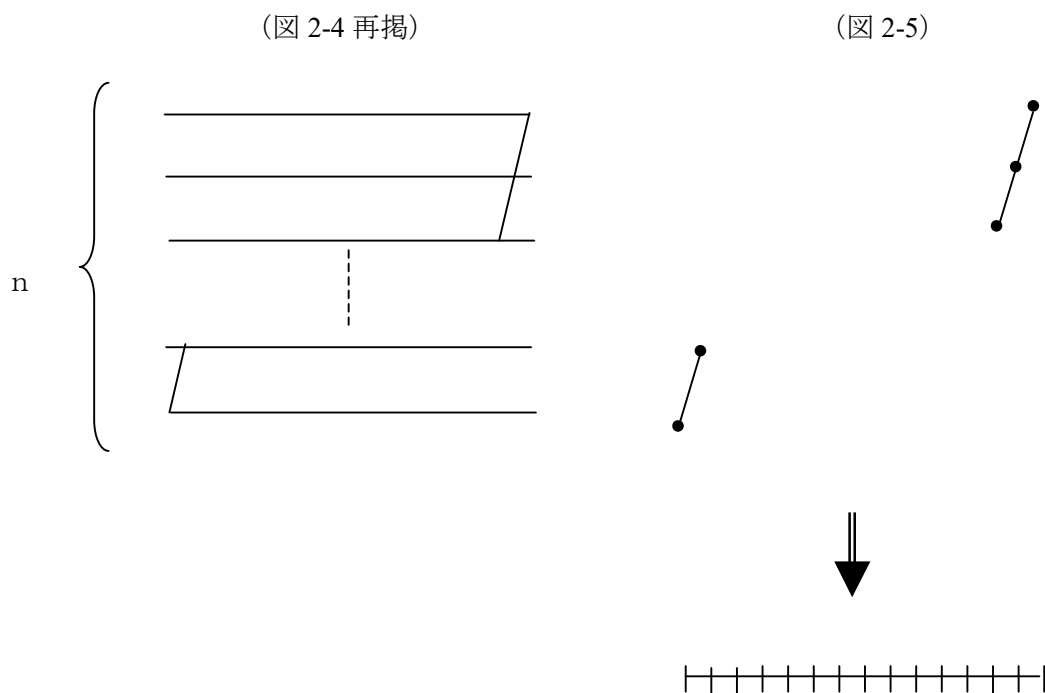


(図 2-4) では n 枚の世界の重ね合わせで世界認識が構成されると説明しました。

より正確に説明すると、(図 4) になります。世界は認識処理で構成されます。認識処理の対象は時間軸が通過する点のみです。よって、時間軸 (図の斜めの線) の通過しない点は存在しないのです。(世界に認識しない点は存在しないのです)

(図 2-4) と (図 2-5) を比較すると、 n 枚の世界が n 個の点で構成されていることが分かります。これは、各点が n 枚の世界の構成要素として使用されることを意味します。

従来の物理学では、一つの点 (素粒子) は一つの原子の構成要素だと考えられていました。しかし、認識処理では一つの点が複数の認識処理の構成要素として使用されることになります。

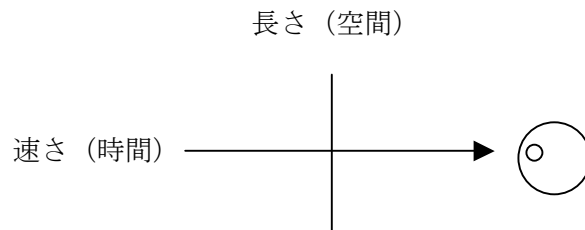


世界はフラクタル構造なので、各点は互いに内包し合っています。ですから、ある点は他の点に内包されます。ある点は他の点の構成要素になっているのです。

速さと長さは直交

速さは時間の方向に成立します。(単位時間当たりの移動距離なので、時間軸方向に成立するのです)

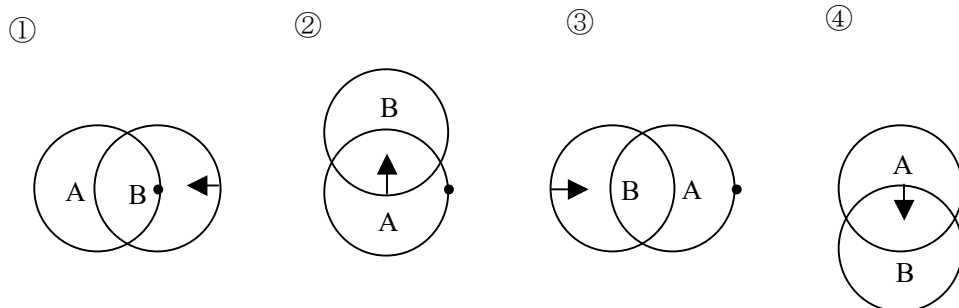
長さは空間方向に成立します。長さは空間の構成要素なのです。
時間と空間は直行します。よって速さと長さは直交するのです。



長さを認識する場合、認識する人が対象物と平行に移動する必要があります。この移動を行う場合、速度が発生するため、特殊相対性理論により対象物の長さが短くなります。長さを正確に測定するためには、認識する人が静止しなければなりません。しかし、静止していても正確に長さを認識することはできません。

以上の説明で、私たちの認識において、速さと長さを同時に正確に認識することはできないことが分かります。

内側と外側の認識 (2重円構造)



(図 2-6)

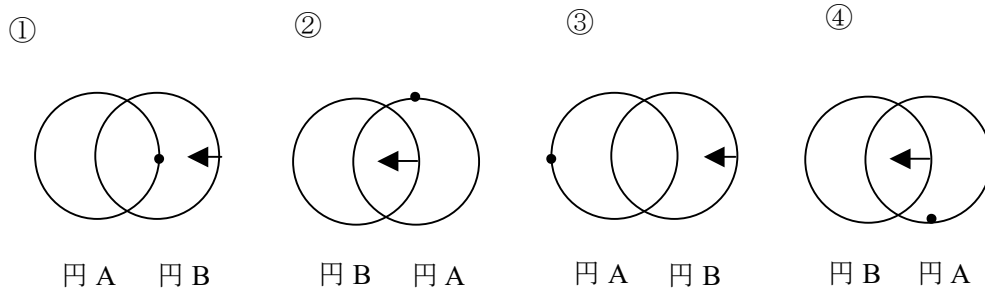
2重円構造における認識について考察します。

点 A を中心とする 円 A の回りを、点 B を中心とする 円 B が回転する場合を考えます。
円 B が 円 A の回りを反時計回りに回転しながら時計回りに自転するものとします。

円 B 上の点で点 A の左右に単振動する点 (矢印) は 円 A をある時は外側、ある時は内側から認識します。

矢印の方向は視線の方向を意味します。円 B の自転に合わせて矢印の方向は変化します。

黒丸は円 A 上の定点を意味します。



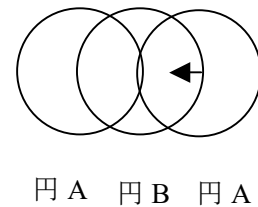
(図 2-7)

(図 2-6) で矢印の方向を一定にすると、(図 2-7) になります。

(図 2-7) をまとめると (図 2-8) になります。

円 B の左右に円 A が位置します。

矢印 (視線) は右の円 (円 A) を内側から、
左の円 (円 A) を外側から見ています。



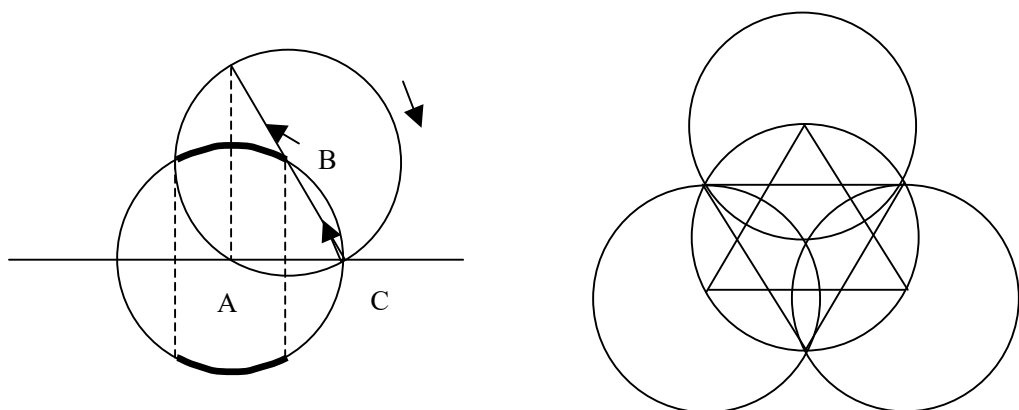
(図 2-7) 円 A 上の定点は回転しています。

私たちの認識は、対象の回転結果ということになります。

しかも、内、外からの認識が連続します。

(図 2-8)

内側、外側から見た A はつながっていることになります。内から見た A の次に外から見た A が見えているのです。



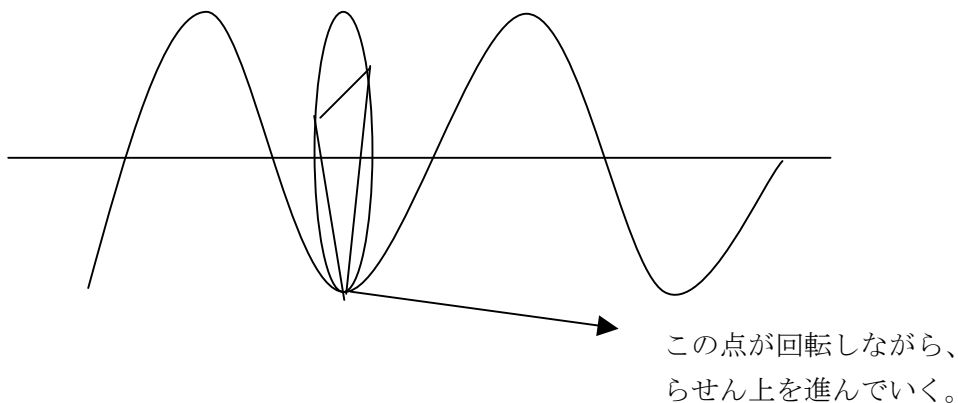
(図 2-9)

(図 2-9 左) 左右に単振動する点 C が円 A の内部を見る範囲は太線部分となります。

(円 A の中心角 60° の範囲が上下にできます)

円 A の回りを 3 つの円が中心角 120° ずれて同様のことを行えば、円 A の内側を全て認識することができます。この構造は 4 重円構造になります。(図 2-9 右)

私達が円形（球形）認識を内側から行う場合、3 箇所において認識像を生成していると考えることができます。これらの 3 箇所の認識を同一平面にない点から同時に認識することにより、3 次元感覚（空間認識）が発生します。



(図 2-10)

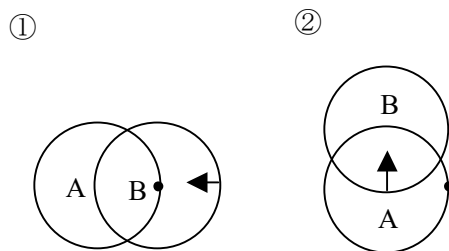
(図 2-10) 4 重円の中心円がらせん上を回転しながら移動する状態を意味しています。2 重円はらせんと中心軸のペアの構造で、らせんと中心軸を入れ替えた構造を重ね合わせるにより成立しています。この構造に 4 重円の中心の形が接しているのがこの図です。

(図 5) 矢印が単振動中に中心に来ると、進行方向と直角の方向を向きます。

②の矢印の方向（上向き）は進行方向（左向き）と直角になります。この場合、矢印の方向の動きは止まることとなります。

これは視線方向への動きを全く感じないことを意味します。

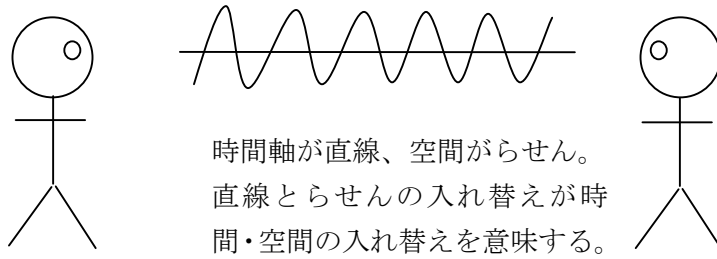
私達の認識結果（世界）は、この状態を全方向につながり合わせて成立しています。その結果、自分自身（認識主体）が動いていると感じないのです。



2-6 (図 5) ①②再掲

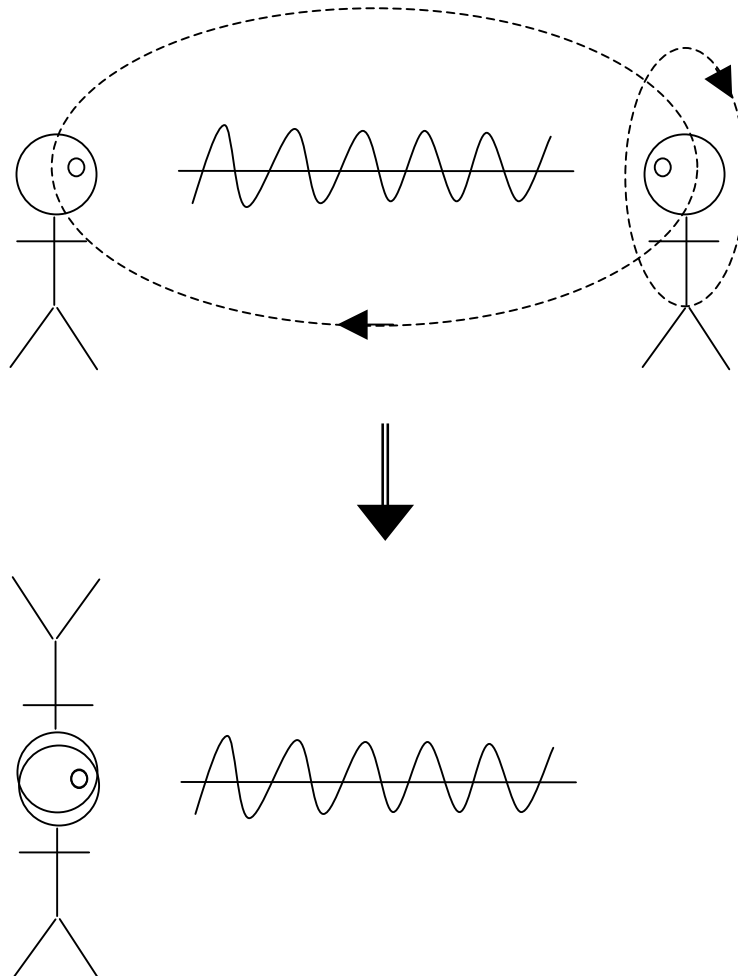
②では速さ(左向き)と距離（上向き）が直交します。このように、速さと距離は直交します。

2方向の意識による認識処理



認識は2方向の意識で成立します。図のように認識主体（直線）と客体（らせん）になる意識を双方からはさみこむ形で認識像が生成されます。らせんと直線が入れ替わることにより、どちらの意識も認識主体・客体になります。このように認識処理を行う意識自体が認識処理の対象になります。

世界は頭部の中の1点を中心として構成されています。2意識で世界が構成されているようには見えません。このように認識像を生成するためには、2意識の方向を180°回転させて重ね合わせる必要があるのです。このように回転することにより、自分自身を中心とする認識像を生成することができるのです。



私たちの認識は図のように5次元上の2方向の意識を重ね合わせた結果として成立しています。図では体が上下に存在していますが、回転しているのは意識だけです。体は認識結果にすぎません。意識の回転を分かりやすくするため、このような図を記載しているのです。

認識像は中心軸を1点に集約する処理を無限回繰り返して行われます。この処理は光速で行われます。認識主体としての光は進行する際、時間がかかりません。ですから、時間経過なしでこの無限回の処理を行うことが可能なのです。(注)

このように光速で無限回の意識の回転処理を行うことにより、私たちの世界(認識像)は生成されているのです。

(注) 光速は約30万(km/秒)とされています。これは認識の主体と客体の間で成立する速度です。認識主体間では認識が成立しません。認識主体は無限大の速度で移動することが可能なのです。

エネルギーも主体と客体の間で成立する概念です。主体間ではエネルギーが発生しないため、速度無限大でもエネルギーは発生しないのです。

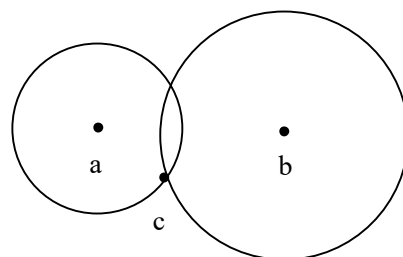
過去と未来

(図2-11) 3点a、b、cの間の認識における過去と未来の関係について検討します。

点cは点a、点bどちらから見ても過去になります。点cの情報が点a、点bに届くまでに時間がかかります。その分、点a、点bは点cの過去を見ることになるのです。

この場合、点a、点bは点cの未来を意味することになります。

しかし点cから見れば、点a、点bは過去になります。(同様の理由です)



(図2-11.)

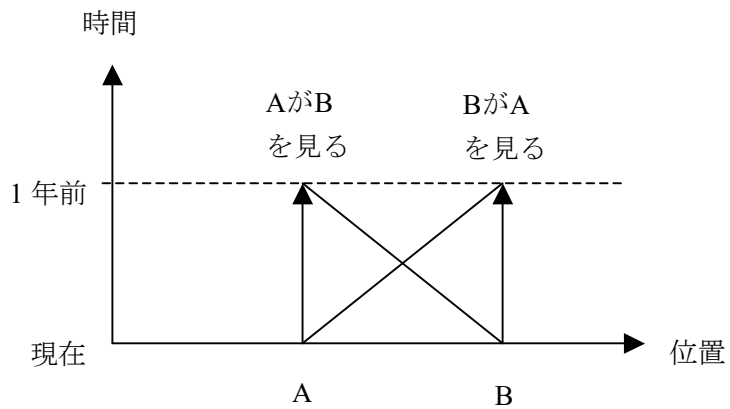
以上から、次の結論を導くことができます。

- ・認識主体(見る側)の場合、外側は過去になります。
- ・認識客体(見られる側)の場合、外側は未来になります。

(図2-12) 点A、点Bが光で1年かかる距離(1光年)離れている時に、互いに相手を見る場合を考えます。

点Aが見る点Bは1年前の状態、点Bが見る点Aは1年前の状態となります。

(斜線は過去を見ることを意味します)



(図 2-12.)

(図 2-13) では、(図 2-12) の点 A、
点 B の状態を 1～4 に分けています。
(横が時間になっています)

対角線が現在を意味します。

① 4→1 の認識と比べると、2は未来
になります。

② 2→3 の認識と比べると、4は未来
になります。

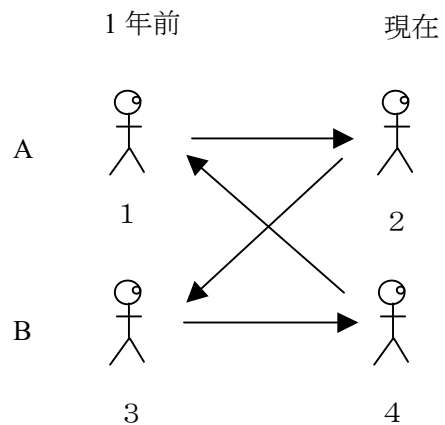
① 2は4の未来になります。

② 4は2の未来になります。

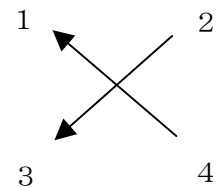
2・4共に相手の過去にも未来にもなっ
ています。これは過去と未来がつながるこ
を意味しているのです。

(右図) 4→1、2→3 の交点は、
両方の認識の同時を意味します。

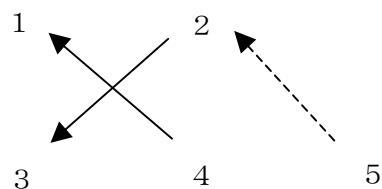
ここが両認識に共通の存在を意味
するのです。



(図 2-13.)



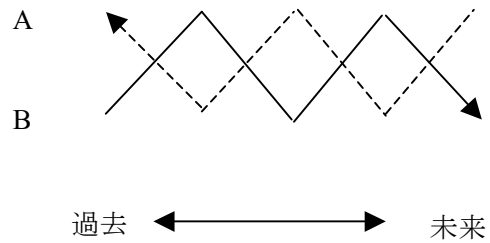
(右図) 5→2の認識を追加します。
すると、5-2-3 の認識になり、
3と5は同じ認識上に存在することに



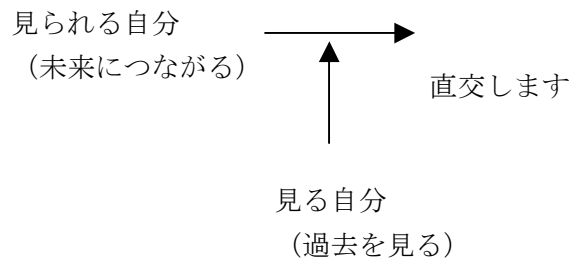
なります。

(右図)

点線： 見る自分は過去をみます。
実線： 見られる自分は未来につながります



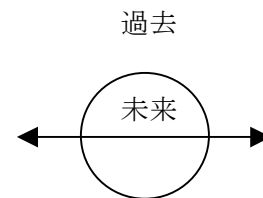
(右図) 見る自分と見られる自分は直交します。



(右図) 2重円の単振動による認識では、円の外側の認識が過去、内側の認識が未来を意味します。

円の中心点の内側には未来が広がっています。

過去と未来はつながっているのです。



大小逆転の連続処理

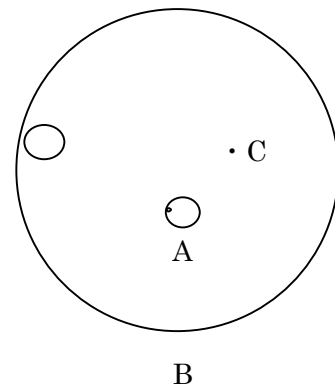
(図2-14) 大小の頭部を意味しています。

A は小さな頭部、B は大きな頭部です。

点C はB から見れば内側です。しかし、A から見れば外側になります。

認識像生成過程で私達は内側を外側に認識していることとなります。

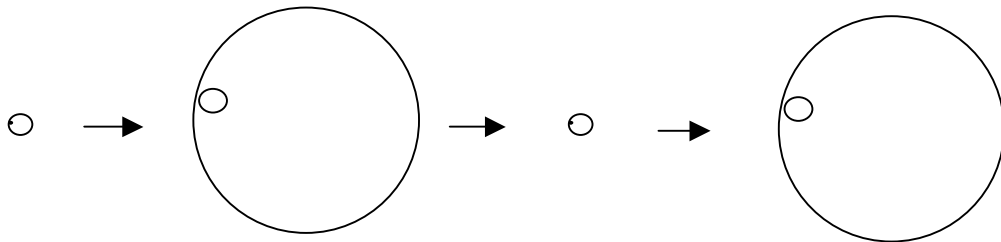
A から見れば A の内側は未来、外側は過去になります。



(図 2-14)

点 C は B から見れば未来、A から見れば過去になります。点 C は A の内側（未来）が外側（過去）になった結果と考えることができます。時間の発生です。

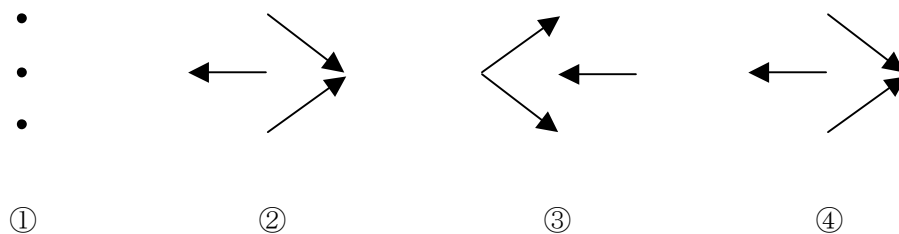
A の内側が外側になることが時間の流れということになります。B は少し前の A の状態ということになるのです。



(図 2-15)

(図 2-15) 外から見た・・・内から見たの繰り返しを意味します。(90° ずつ回転させて認識した結果になります)

この繰り返しが認識の基本ということになります。



(図 2-16)

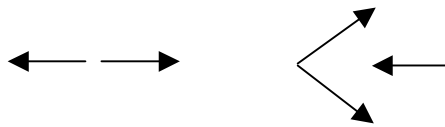
(図 2-16) 大小の入れ替え構造を意味します。①～④ の順で処理が行われます。中心→上下により広がり（大）を認識し、上下→中心により点（小）を認識します。

①の上下の点が ③では中心になります。

①の中心の点が ③では上下の広がりになります。

このように、①と③では上下と中心が逆転します。これは認識の大小逆転を意味します。この原理で大小逆転を実現しているのです。

尚、(図 2-16) の前に下図の ①-1、①-2 の処理が必要です。



①-1

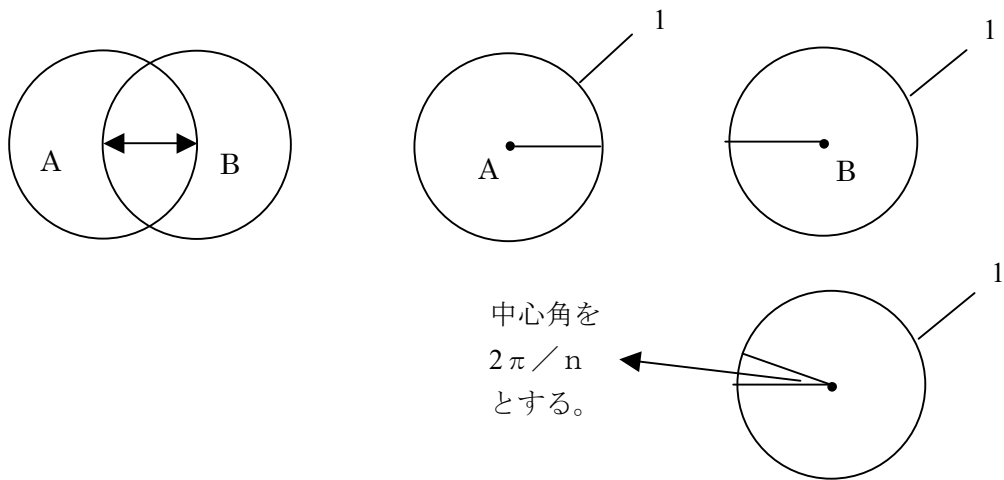
①-2

e の物理的構造

自然対数の底 e ($= 2.718\dots$) は認識の基本となる数字です。

2重円構造の中心間の移動が e の認識を意味します。

2重円の左右の円を分けてこの構造を説明します。



認識主体（認識の中心）が中心間を移動すると仮定します。

点 A を中心とする円 A と点 B を中心とする円 B の 2 重円を想定します。

(図 2-17) 参照

- ① 点 A から円 A 全体を認識します。円全体の認識で 1 になります。(円周で 1)
- ② 点 B に移動し、円 B を認識します。円全体で 1 になります。この円上の 1 点 (点 A) は大きさ $1/n$ になります (円全体が n 点で構成されるとします)。ここに①の世界全体が内包されています。

以上から、認識結果は全体で $1 + 1/n$ になります。

尚、 $A \rightarrow B$ と $B \rightarrow A$ の認識では方向が 180° 異なります。左右に 180° の回転を行うことにより、認識方向を一致させます。さらに、上下方向に 180° の回転を行います。 $A \rightarrow B$ の移動時にこの回転を行います。

(以下、 $A \rightarrow B$ 、 $B \rightarrow A$ の移動時には常に同様の回転を行います)

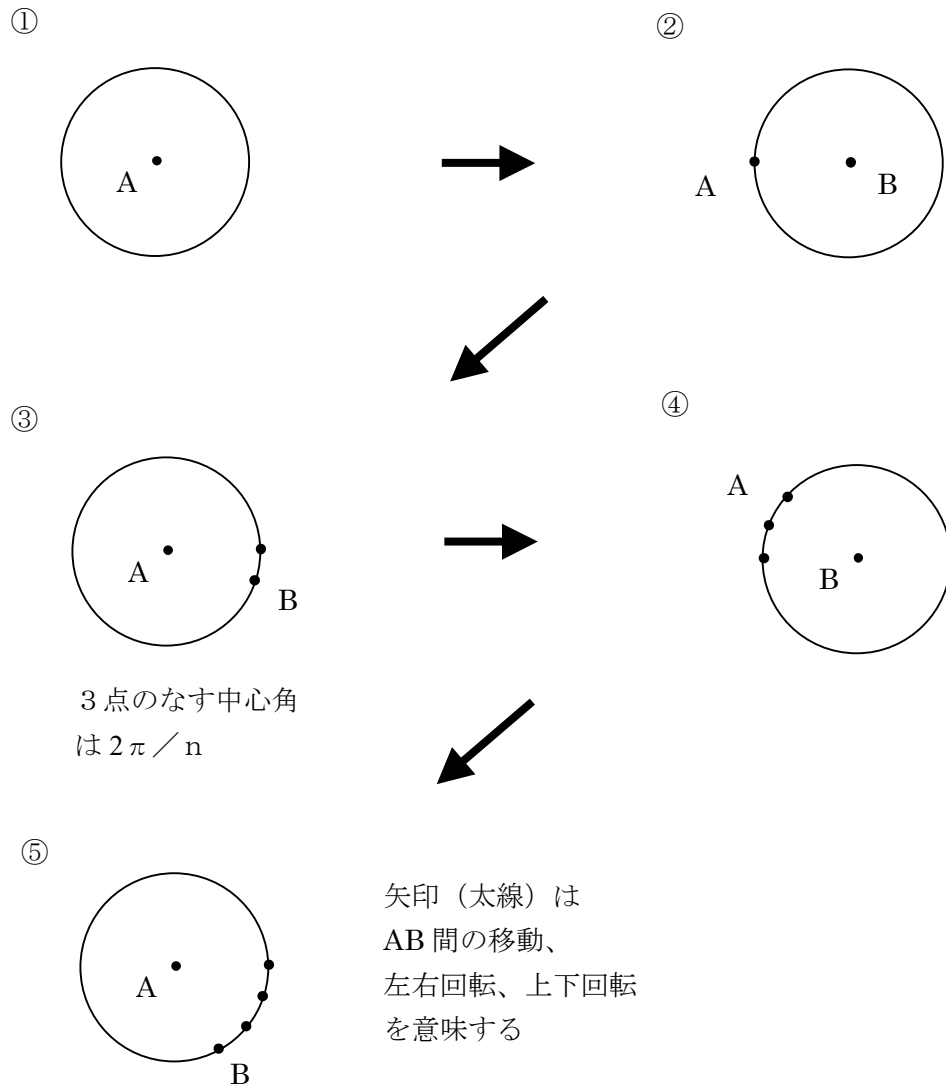
A、B が中心の認識像を生成するためには、A と B を重ねる必要があります。

私たちの認識は、頭部の中の 1 点を中心とする状況になっています。これは、様々な認識ポイントを 1 点集約することにより認識を行っているということなのです。

AB間を光速で移動すると時間は経過しません。その結果、A、B が重なった状態の認識像を生成できるのです。

- ③ 点 A に移動します。②の中心間の方角に対して中心角 $2\pi/n$ の方向に移動します。円 A を円 B の回りを公転させながら自転させることにより、移動方向と点 A を合わせます。

点 A から円 A 全体を認識します。円全体で $(1 + 1/n)$ になります (③の認識結果



(図 2-17)

が残ります)。

さらに円上の1点(点 B)の認識が加わります。大きさは $1/n$ で $(1 + 1/n)$ の認識を内包しています。

以上を合わせると、認識結果は全体で以下になります。

$$(1 + 1/n) + (1 + 1/n) \times 1/n = (1 + 1/n) (1 + 1/n)$$

④ 以下、直近の中心間の移動方向に対して中心角 $2\pi/n$ だけ回転させながら中心間の移動を繰り返します。

(中心の方向が一致するように公転・自転を行います)

(左右の円周上を1周するまで続けます)

この時、認識結果は全体で e になります。

$$(1 + 1/n)^n = e \quad (n \rightarrow \infty)$$

①~④から、 e の物理的構造は、2重円の中心間を移動しながら認識を繰り返す構造であることが理解できたこととなります。円上の全ての点に全空間が内包される空間認識が生成されたことになるのです。

このように e は空間のフラクタル構造を意味しているのです。

e は2重円の中心間の移動による認識を意味することが分かりました。

この動きはそのまま5次元の時間と空間の入れ替えを意味します。このように、 e は5次元の基本となる数字なのです。 e は5次元構造(フラクタル)を意味しているのです。

空間認識は5次元による時間と空間の入替により成立しているのです。

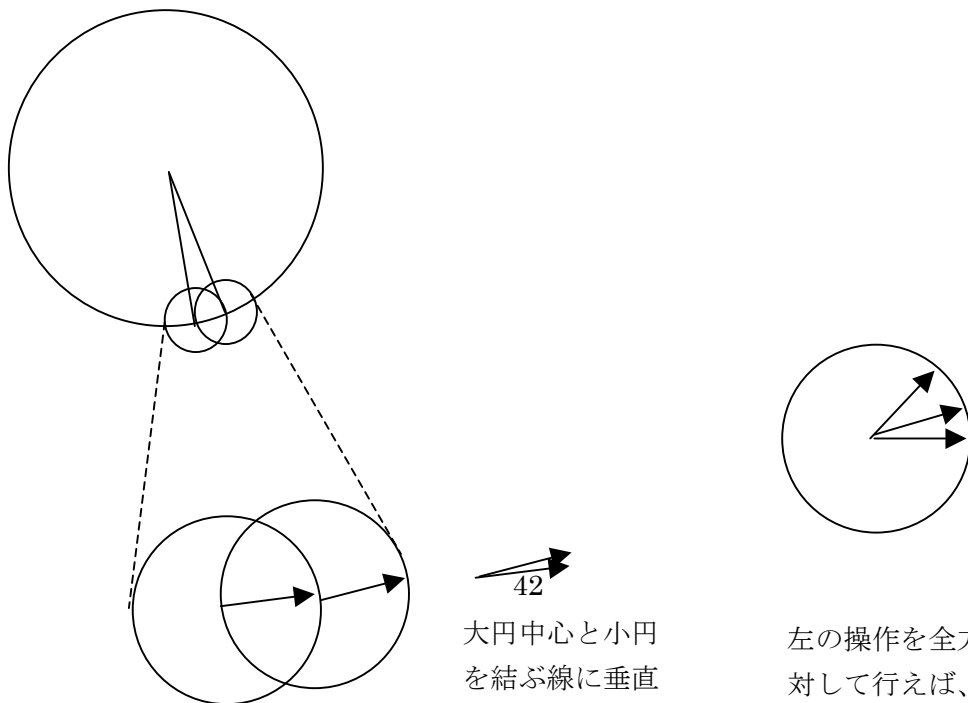
尚、(図 2-17) の左 (①③⑤) は点 A を中心とする認識、右 (②④) は点 B を中心とする認識を意味します。この両認識では認識方向が逆になっています。左右・上下方向へそれぞれ 180° ずつ回転させ、両方の認識を重ね合わせることで、認識像を生成します。

e の認識処理 (大円と小円)

(図 2-18) は大円と小円による e の構造を意味します。2重円(共に小円)の中心間の距離が大円の円周の $(2\pi/n)$ 倍の距離になります。

e はフラクタル構造なので、図のような大円と小円の関係が連続しているのです。

尚、 e は2重円の中心間の移動による認識ですが、両方の円の認識結果を重ねるため、認識像は1つになります。



大円中心と小円を結ぶ線に垂直な方向は $2\pi/n$

左の操作を全方向に対して行えば、全方向の点になる

(図 2-18)

2重円（小円）の中心と大円中心のなす大円の中心角は $2\pi/n$ (rad) になります。
e の認識処理を行う際、中心角を $(2\pi/n)$ ずつ回転させるのは、円上の全点を認識するためです。そのために、少しずつ回転させるのです。

大円2つで2重円を構成する場合、認識対象となるのは円周の $(2\pi/n)$ 倍の領域です。これが2重円（小円）の中心間の距離になっています。

e の構造はフラクタルなので、大円と小円の関係が無限に続きます。ですから、大円の円周の $(2\pi/n)$ 倍の距離が、小円の構成する2重円の中心間の距離としても認識されることになります。

結局、e による空間認識で認識処理の対象となるのは、2重円の中心間の距離のみとなるのです。フラクタルにより、これが大円の部分（円周の $(2\pi/n)$ 倍）、即ち2重円（小円）の中心間の距離として認識されるのです。

このように、私たちの空間認識は2重円の中心間の距離をフラクタルで様々な大きさに変換することにより構成されています。

2重円の中心間を私たちの意識が往復します（認識処理のため）。この意識の動きをフラクタルで変換することにより、空間は構成されているのです。

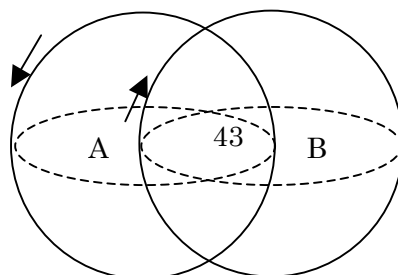
世界の構成要素は認識処理を行う意識そのものということになります。世界は認識処理成分で覆われているのです。

世界は意識による認識処理結果なのです。

多重らせんは 90° の方向転換

2重円構造による認識では、認識像が平面上に生成されます。しかし、私たちの世界は3次元（縦、横、高さ）で構成されています。この認識状態を説明するためには、2重円構造では不十分です。3次元状態の認識像を生成するためには、2重球構造が必要です。

2重球構造は、中心軸とらせんで中心軸が縮退した構造です。（第1章ご参照）



2重円構造は平面上で処理されます。(上図)の実線部分が2重円を意味します。2重円の認識処理(eの認識処理)終了後、軸ABの周りに $(2\pi/n)$ だけ回転し、新たに2重円処理を行います。この処理をn回行くと、2重球上の全点の認識処理が完了することになります。

前節「eの認識処理(大円と小円)」で、2重円の中心はさらに大きな円周の線分であり、 $(1/n)$ 倍の長さに該当することを説明しました。

2重球構造にも同様の関係があります。中心軸ABはさらに大きい円周の $(1/n)$ 倍の長さになります。

認識処理構造は多重らせんによるフラクタル構造になっています。ですから、2重円(球)の中心間の距離は、同時に円(球)の成分にもなっているのです。

2重球構造は、2重円(2重球の一部)の存在する平面に直交する方向の意識軸を縮退することにより得ることができます。軸ABの方向と、ここで縮退した意識軸の方向は直行することになります。

多重らせん構造では、らせんの中心軸がさらに大きいらせんを構成します。この時、らせんの縮退方向と大きならせんの縮退方向は直行することになります。らせんの進行方向が 90° 回転することになるのです。

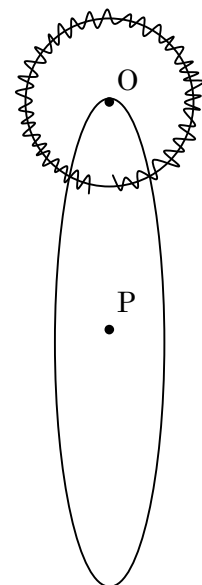
(図) 点Oを中心とする円O。円Oを中心軸とするらせんO。点Oを通り、円と直交する円Pを描いています。

円Oが円ではなく、円Pを中心軸とするらせんPだとします。

この場合、らせんOとらせんPは2重らせんを構成します。

円Oと円Pは直交するため、2重らせんの方向は互いに直行することが分かります。

このように、多重らせんは 90° ずつ回転しながら重なり合うのです。



特殊相対性理論の本質的意味

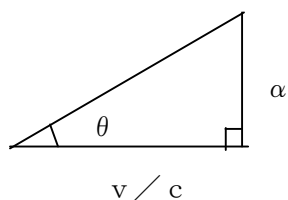
速さ v で動く物を静止している人が見ると、進行方向の長さが静止している時より短くなります。(特殊相対性理論)

静止している時の長さ、以下で定義する α を掛けると、運動時の長さを求めることができます。

$$\alpha = \sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}$$

v : 運動の速さ
 c : 光速

$$\alpha^2 + \frac{v^2}{c^2} = 1$$



これは (図) の関係を意味しています。

ピタゴラスの定理から、直角三角形の2辺に α と v/c が該当します。

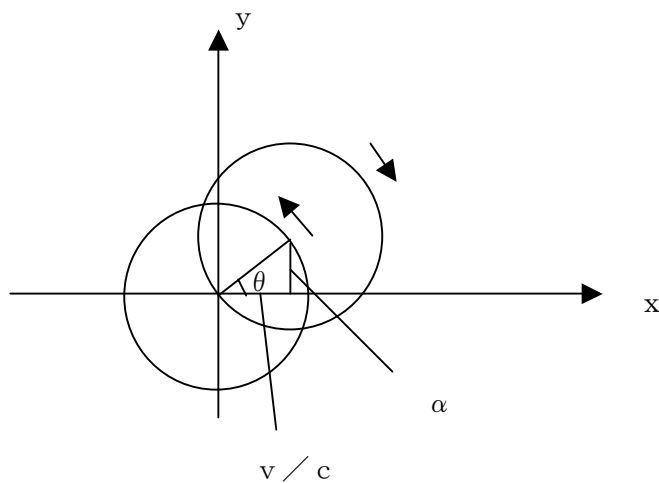
$$v = 0 \quad \text{で} \quad \theta = 90^\circ$$

$$v = c \quad \text{で} \quad \theta = 0$$

v/c は、運動する速さを光速 c で割った値です。ですから、速さ方向の成分になります。

α は長さに掛ける係数なので、長さ方向の成分です。距離方向の成分なのです。

α と v/c は直交しています。このように、距離と速さというのは本来直交しているのです。



(図 2-19)

(図 2-19) は半径 1 の円 2 つによる 2 重円を意味します。右上の円が XY 座標中心の円の回りを公転しながら (反時計回り) 自転しています (時計回り)。

- $\cos \theta$ が v/c
- $\sin \theta$ が α

にそれぞれ該当すると考えます。

Y 軸上を単振動する点を考えます ($\theta = 0$ で原点にあった点)

$\alpha = \sin \theta$ に比例する成分を、私たちは長さと呼んでいることとなります。

$v/c = \cos \theta$ 、 $v = c \times \cos \theta$ 成分のことを私たちは速さと呼んでいることとなります。このように、長さとは速さは直交しているのです。

認識は回転により行われます。速さは長さを時間で微分することにより得ることができます。よって、三角関数 ($\sin \theta$) の微分で v/c を得ることができるのです。

逆に v/c を積分することで、長さを得ることができます。

速さや長さが回転による認識処理結果です。この場合、回転角度によって長さや速さにマイナスが発生することになります。 ($\theta > 90^\circ$) 長さや速さがマイナスとは何を意味するのでしょうか。

時間と空間を入れ替えた世界がこの状態に該当します。内面意識の世界です。

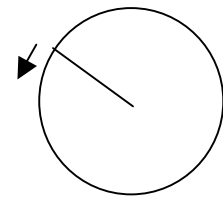
長さとは速さは直交します。同一方向の長さとは速さを同時に認識することはできません。

世界は認識処理の結果です。認識は意識の作用です。

(右図) 意識の流れが全てなのです。これを速さと長さの成分に分けているのです。

速さは長さの微分、長さは速さの積分として認識しています。

このように、認識には互いに直交する成分が必要なのです。



速さは認識主体を固定とした場合の対象の動きを表す方法の 1 つです。

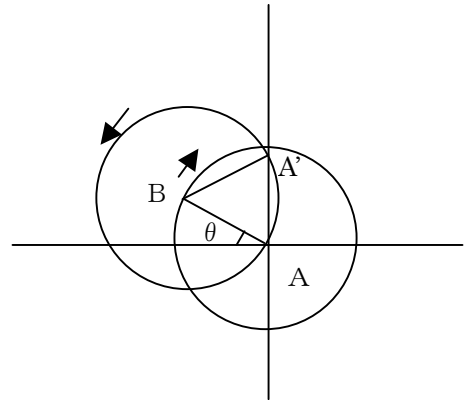
自分自身の速さという概念はそもそも起こり得ません。自分が動いているという場合でも、周囲の動きと逆方向に自分自身が動いている、と定義しているにすぎないのです。

長さも速さも認識客体 (対象) のことを意味しています。認識主体は形を持ちません。

よって、長さも速さもゆらぎをもっていることとなります。(長さとは速さに 90° の位相差があるためです)

(図 2-20) 中心を点 A とする円 A、点 B とする円 B の 2 重円について考察します。

点 B が円 A 上を移動しながら逆方向に自転する場合、回転前に円 B 上で点 A に位置していた点の回転後の位置、点 A' の動きについて考察します。



(図 2-20)

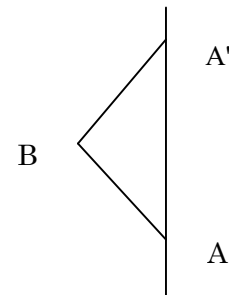
$$\begin{aligned} \text{AB ベクトル} &= (-\cos \theta, \sin \theta) \\ \text{BA' ベクトル} &= (\cos \theta, \sin \theta) \\ \text{AA' ベクトル} &= \text{AB ベクトル} + \text{BA' ベクトル} \\ &= (0, 2\sin \theta) \end{aligned}$$

以上から、A' の動きは振幅 2 の単振動になります。

AA' を認識しているとします。

これは正しくは A-B-A' と認識しているのですが、B を無視して AA' を認識していると感じています。

この A-B-A' と A-A' の長さの比が特殊相対性理論の長さの変化の発生原因だと考えられます。



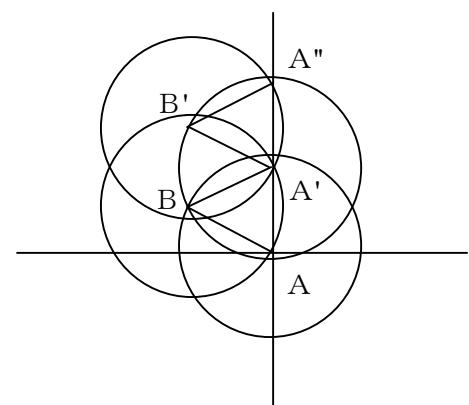
2 重円の連続処理による空間認識

(図 2-20) では、2 重円の A-B-A' の認識について考察しました。

更に同様の認識を繰り返す場合について検討します。

(図 2-21) 点 A' を中心とする円 A'、点 B' を中心とする円 B' を考えます。点 A と点 A' が一致している時には点 B と点 B' は一致しています。

点 B' が円 A' 上を (図 2-20) の点 B と同様に円 A' 上を公転しながら自転する場合を考えます。点 B' の回転前に点 A' と同じ位置にある円 B' 上の点を点 A'' とします。



(図 2-21)

この時、A-B-A'-B'-A'' の認識結果は

$$\text{AA'' ベクトル} = (0, 4\sin \theta)$$

となります。振幅 4 の単振動になるのです。2 重円の処理を 1 回追加する度に振幅が 2 だ

け大きくなります。

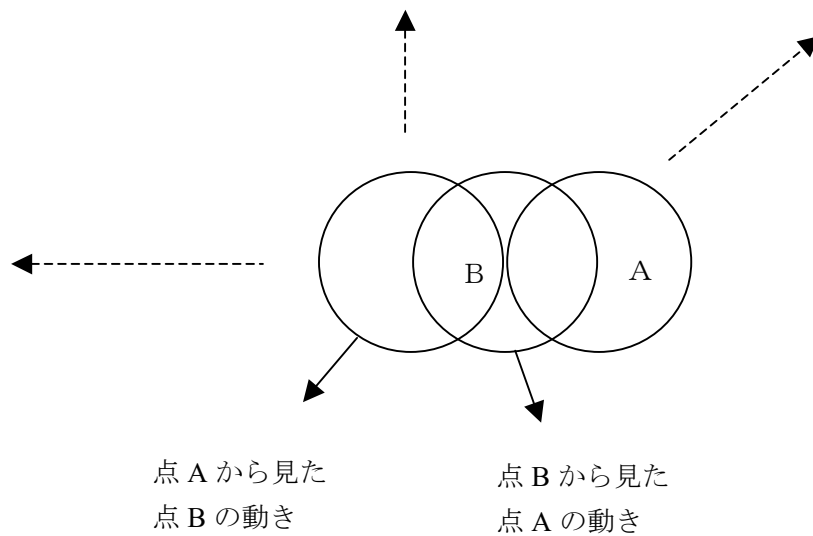
このように、2重円による認識処理を連続させることにより単振動の振幅を拡大することができるのです。

円の重ね合わせが波のような形状になるのが特徴です。

(図 2-22) も 2 重円の連続処理を意味しています。

認識主体を、点 A—点 B—点 A—点 B—・・・ と繰り返し移動することにより、認識像は無窮大に拡大することがわかります。

電磁波は認識処理の構造です。2重円構造がその基本になります。2重円構造では処理を連続させることによる認識が波として全方向に広がります。



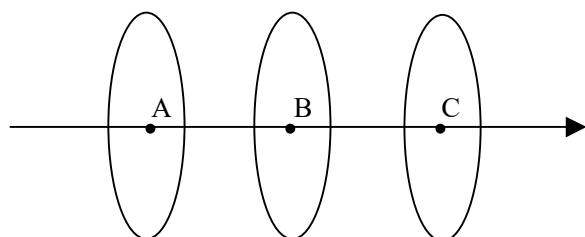
2重円構造はらせんと中心軸のペアで構成されます。中心軸とらせんが入れ替わることにより、中心軸もらせんになり、全方向を向きます。その結果、2重円に平行な平面は様々な方向を向きます。

その結果、2重円処理による認識が空間の全方向に広がることになるのです。

認識主体の長さ変更

(右図) の構造で矢印は視線を意味します。

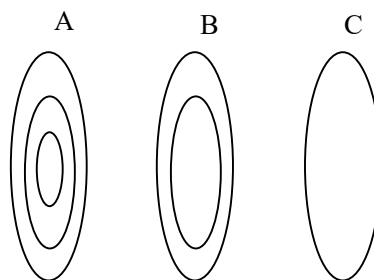
- ・点 A より左からは 3 重円、
 - ・点 A～点 B より左からは 2 重円、
 - ・点 B～点 C より左からは 1 重円
- をそれぞれ認識できます。



中心軸上の認識処理の範囲により
円の多重度（重なる円の数）が変わ
ることになります。

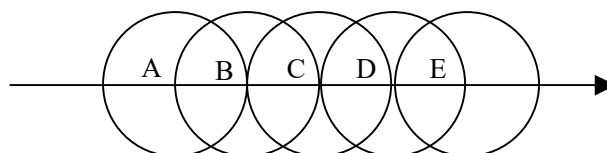
この重ね合わせが電子軌道の多重
階層構造の本質的な理由です。

らせんの中心軸の長い範囲を使って
1つの原子の認識処理を行うためです。
その結果、電子軌道が多重化されるの
です。



（右図）2重円構造を連続させた
構造を考えます。

図を波と考えた場合、認識処理の
範囲により、周波数が変わります。



点A～点Eを円の中心点とします。

点Aを基準として点Bまでとすれば
認識対象となる円は1つです。周波数は

1になります。（1回の認識処理で認識できる波の数は1つです）

点Aを基準として点Cまでとすれば円は2つになります（周波数2）。

点Aを基準として点Dまでとすれば円は3つになります（周波数3）。

点Aを基準として点Eまでとすれば円は4つになります（周波数4）。

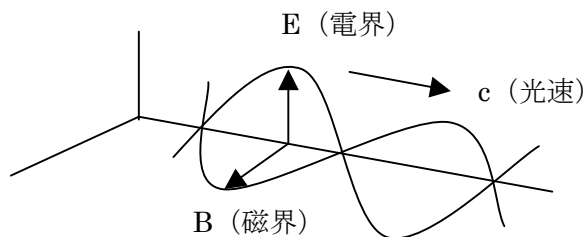
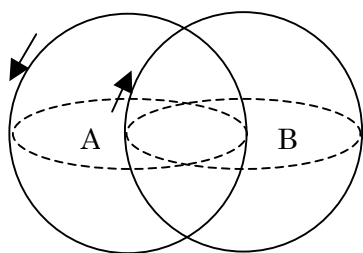
これは、同じ円が認識方法により周波数1の振動にもなれば4の振動にもなることを意味
しています。

認識像（世界）は、様々な周波数の三角関数（sin、cos）を重ね合わせるにより生成
されています。その際に必要となる様々な周波数を、ここで紹介したような認識範囲変更
により生成しているのです。

電磁波と2重球構造の関連

2重球構造は、中心軸とらせんで中心軸が縮退することにより生成されます。この構造で
は、単振動により左の球上の点は右の球と直行します。右の球上の点は左の球と直行します。
この単振動の方向と縮退前の中心軸の方向は、直交します。

電磁波は、電界と磁界が直交しながら、電界、磁界と直行する方向に進行します。この関
係は2重球と同じです。

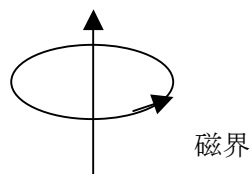


電磁波の進行

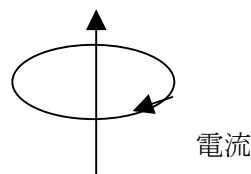
電流を流すと磁界が発生します。また、磁界を発生させると、それを打ち消す方向に電流が流れます。

これらの操作で発生する磁界、電流の方向は互いに逆回転になります。

以上から、電磁波における電界から見た磁界、磁界から見た電界は互いに逆回転することが分かります。



電流



磁界

2重球は2重円構造の中心軸（円形）を縮退させた構造です。

2重円は中心軸とらせんによる認識、及びらせんと中心軸を入れ替えた認識を重ね合わせて生成します。らせんと中心軸を入れ替えた認識では認識の方向を反転させます。その結果、2重円の中心から見た回転方向は互いに逆回転となります。

以上の考察から、電磁波と2重円生成元になる中心軸（らせん）とらせん（中心軸）のペアが同じ構造であることが分かります。

らせんの中心軸は多重らせん構造です。中心軸自体が更に大きならせんを構成しています。この大らせん1周を縮退して1点にすることにより、2重球構造を生成します。

よって、2重球構造は電磁波の進行方向を縮退した構造になることが分かります。

2重円構造は意識の構造であり、意識は光速で移動すると説明しました。（意識は光である

と同義)。電磁波（光）と 2 重球構造の比較によりこれらの説明が正しい点をご理解頂けると幸いです。

2 重球構造で球の中心間を 1 点に集約すると、2 つの球は重なります。この重ね合わせが電子軌道に該当します。2 つの球は互いに逆方向から認識するため、回転方向が逆になります。電子のペアは回転が互いに逆になります。2 重球の場合とこの点でも一致します。

複素数の物理的構造

実軸（実数）と虚数（虚軸）で構成される平面を複素平面と呼びます。複素平面は現実の世界を表すためではなく、あくまで数学の世界の平面だと考えられています。

しかし、5 次元を扱う上で、複素平面は必須です。

2 重円構造の中心間の移動方向が虚軸（ i 軸）方向を意味しているのです。

認識には主体と客体が必要です。中心軸とらせんのペアでは中心軸が主体、らせんが客体になります。中心軸とらせんを入れ替え（主体と客体を入れ替え）、入れ替え前の中心軸、らせんのペアと重ね合わせて、中心軸方向から見ると、2 重円構造ができます。

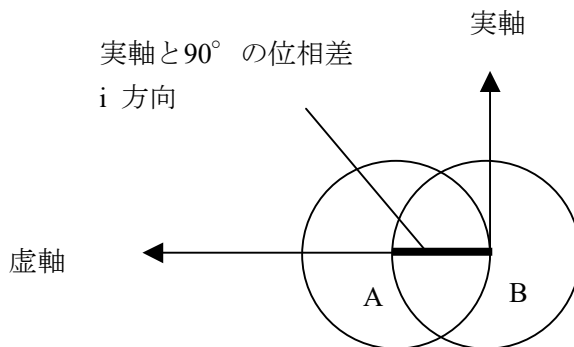
認識の主体と客体を入れ替えることにより、認識像（世界）は生成されます。

主体と客体の入れ替えは、認識主体の移動（2 重円の中心間の移動）により行われます。

2 重円における認識対象（実数）は円になります。2 重円の中心間の移動により、認識対象となる円が入れ替わるのです。

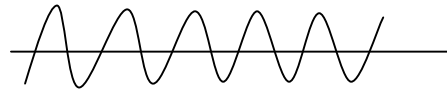
この 2 重円構造の中心間の移動方向が虚軸（ i 軸）方向です。

認識処理を含めた世界の構造原理である 5 次元に複素平面は必須なのです。



波と粒子の2面性

全ての物質には粒子としての性質と波としての性質が共にあります。物質には波と粒子の2面性があるのです。



らせんと中心軸の組み合わせが認識の基本構造です。

- ・中心軸 → らせん の認識では波動の認識になります。
- ・らせん → 中心軸 の認識では粒子の認識になります。

私たちはこのように粒子、波動の認識を全宇宙空間について瞬時に行っています。これが世界の構成要因なのです。

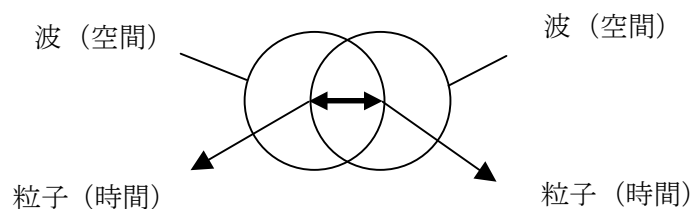
意識には形があり、この形の組み合わせにより各種のエネルギーや物質が発生しています。意識こそが世界の成立要因なのです。

波と粒子の2面性は、波が粒子になり、粒子が波になることを意味します。これは中心軸とらせんの組み合わせで考えると、中心軸とらせんが入れ替わることに該当します。

らせんの中心軸とらせんの入れ替えは2重円構造の中心間の移動により行われます。本書ではこの移動による時間・空間の入れ替えを5次元と定義しました。波と粒子の2面性は5次元により実現されるのです。

よって、波と粒子の2面性とは空間（波）と時間（粒子）の2面性を意味することになります。波が空間に該当し、粒子が時間に該当するのです。

5次元（2重円の中心の入替）が無ければ、波と粒子は入れ替わらないのです。

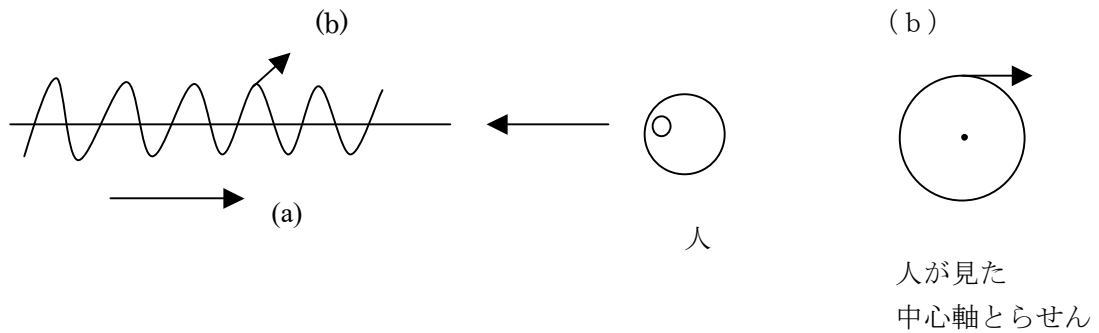


波と粒子の2面性から、人は波として空間を構成していることになります。この空間がオーラなのです。

オーラとは、時間と空間を入れ替えた世界（5次元／内面世界）の人の状態を意味します。

周囲の人々に奉仕・貢献を続ける人のオーラは大きくなり、自己中心的な人のオーラは小さくなるのです。

2重円中心間の移動方法



らせん方向のベクトルを分解すると、中心軸に平行な成分(a)と円に接する成分(b)になります。

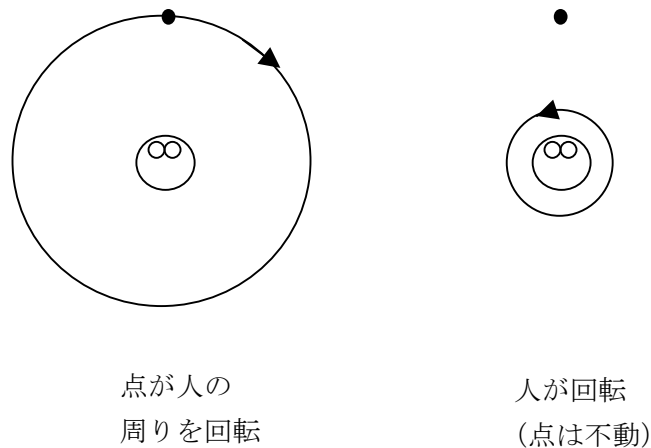
中心軸と視線を合わせ、らせんと同じ回転をしながららせんを見ると、中心への直線に見えます。

(b)の成分を、らせんに合わせて回転した人から見ると、回転を感じなくなります。回転成分を回転しながら見るので、相対的に回転は無くなるのです。

このとき、らせんの成分(a)、(b)のうち、(a)だけが残ることになります。

(a)は中心軸に平行な成分。よって、これは時間方向ということになります。

・・時間方向がらせんの中心軸方向と2重円の中心軸方向という直行する2方向に出現することになります。



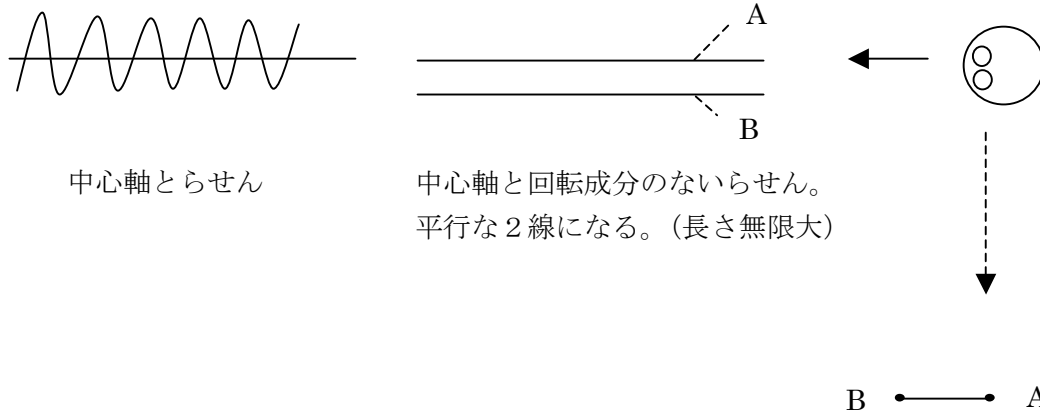
(図2-23)

(図2-23)で人から見た点の動きは同じです。

らせんの回転も、中心軸上の認識ポイント(認識の中心)が回転することにより成立して

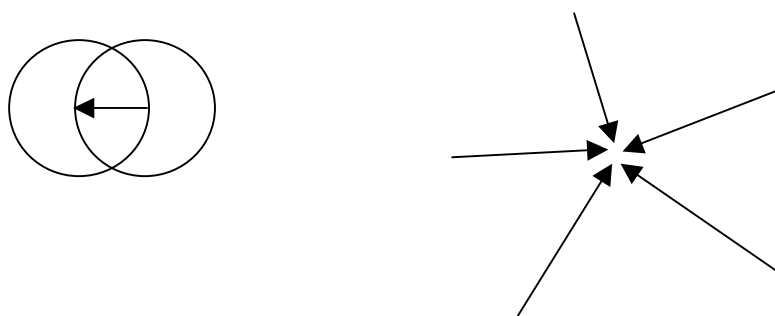
いると考えられます。

らせんの回転に合わせて回転するという動きは、上の認識ポイントの回転を停止することに相当するのです。



中心軸方向から見ると、このようにつながって見えることになる。これは2重円の中心間の移動線を意味する。

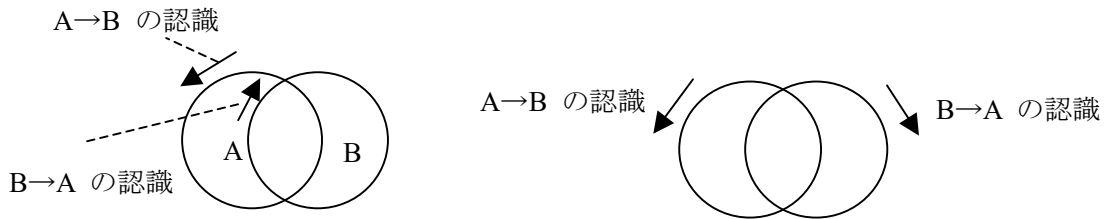
認識主体が2重円の中心間を移動することにより、時間と空間の関係が入れ替わります。よって、らせん・中心軸の一方を時間もしくは空間と決めつけることはできません。両方共に時間でもあり、空間でもあるのです。



2重円中心間の動きの方向は、回転により変化します。時間方向には様々な種類があることとなります。

平面上を全て時間方向で埋め尽くすことが可能なのです。

2重円は鏡像原理

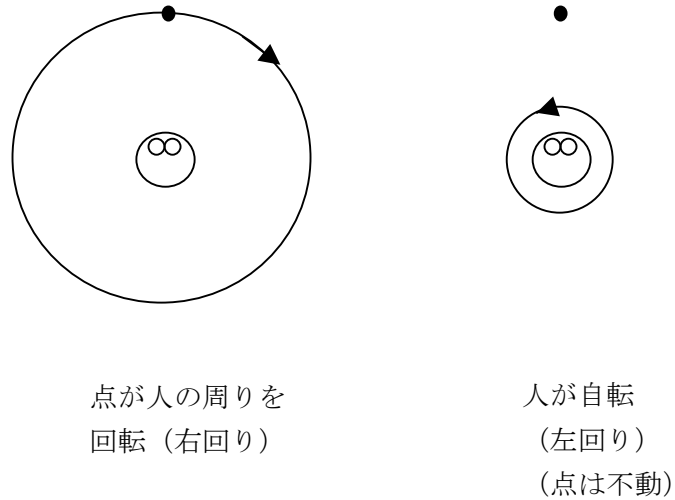


(図 2-24)

2重円の運動についてさらに考察を進めます。

(図 2-24 左) 2重円の回転は2円の自転の合成と考えることができます (図 2-24 右)。(図 2-24) の左右の図の回転は、相対的に同じ運動になります。

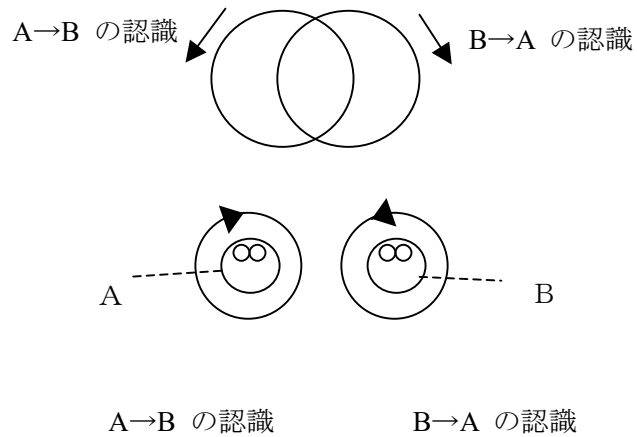
(図 2-25) 人から見た点の運動は同じに見えます。



点が人の周りを
回転 (右回り)

人が自転
(左回り)
(点は不動)

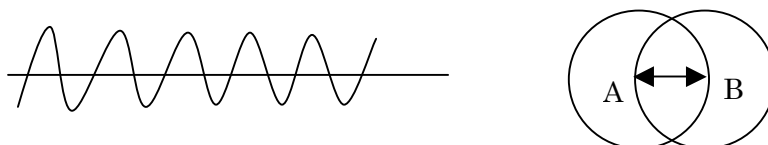
(図 2-25)



(図 2-26)

(図 2-26 上) と(図 2-26 下)の 2 種類の回転は相対的に同じです。

2 重円の回転を (図 2-24 左) のように説明してきましたが、より正確には (図 2-26) のような回転運動になります。



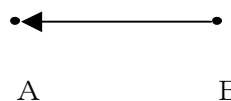
2 重円の中心には、らせん運動と中心軸の 2 種類の役割があります (認識主体の中心間の移動による)。

中心軸の時、自転することによりもう一方の中心を回転して認識します。

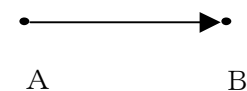
らせんの時には自転する必要がありません。らせんは回転が停止しているのです。

この時に、2 重円の中心を結ぶ認識が発生します。回転する方からしない方へ認識主体が移動するのです。

A が自転せず、B が自転する場合
(A がらせん、B が中心軸)



A が自転して、B が自転しない。
(A が中心軸、B がらせん)



以下繰り返します。A、B の自転は交互に進むことになります。

A と B は同時には回転 (自転) しません。

必ず一方が中心軸になり、他方がらせんになります。

中心軸が自転すると、他方が静止します。(自転しない)

よって、意識が他方へ移ります。他方が中心軸として回転することになります。

交互に自転と静止を繰り返して、認識像を生成します。

以上の認識処理の内容を整理します。

①中心軸方向を見る。軸が縮退化し、らせんが円形になります。

②中心軸が自転します。

③中心軸の移動が起こります (中心がらせんに移ります)。

④認識の方向が反転します。

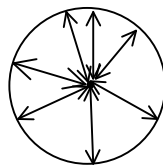
⑤新たな中心軸方向を見ます（1のらせんを中心軸として逆方向から見ます）。軸が縮退化し、らせん（1の中心軸）が円形になります。

中心軸かららせんを認識するためには、中心間の往復を行う必要があります（らせん上の全点）。この往復をしながら中心軸の縮退を行う必要があります。

中心軸を長く見渡せるから2点がつながるのです。2点がつながるから中心間の往復が起こるのです。中心軸を見渡せるだけでは中心軸の縮退は起こらないこととなります。中心軸（らせん）には十分な長さが必要なのです。

中心軸を見渡すことによる2点間の往復を繰り返しながら、軸の縮退が行われることとなります。

回転を認識するためには、中心と円周の相互の位置関係を把握する必要があります。円上の全ての点において、この操作が必要です。円上の全ての点で、中心との位置関係を相互に把握する必要があります。この位置関係の把握のため、2点間を移動するのです。中心と円周上の点を移動することにより、2点の位置関係を把握することが可能なのです。



円の全ての点で中心との位置関係を把握する。AB間を移動はこのために必要なのである。

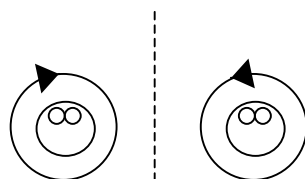
以上から、2重円構造、2重球構造は全て中心の2点だけで構成できることが理解できたこととなります。2点の自転及び相互作用で2重円、2重球が共に生成可能なのです。

2重円を構成する2点は共に自分自身の意識です。一方を表面意識、他方を内面意識と呼びます。私たちの通常の意識が表面意識です。こころと呼ばれる意識が内面意識です。

表面意識と内面意識の相互作用が世界の成立要因です。ですから、私たちが周囲に対して行う行為（表面意識の想念行為）は全て内面意識に対して行う行為ということとなります。

私たちが見ているのは表面意識の世界なのです。

私たちの思い（内面意識の働き）は表面意識（内面意識で見る世界）に影響を与えていることとなります。



内面意識と表面意識は鏡で映したような構造になっています。これを鏡像原理と呼びます。
内面意識の世界の状態を表面意識の世界に映し出すことにより、世界は成立しているのです。内面意識の世界を実在する世界とも呼びます。

実在する ・ ・ 内面意識の世界にイメージがある。
実在しない ・ ・ 内面意識の世界にイメージがない。(病、地震、台風、業 ・ ・ ・)

内面意識の世界そのままの世界が実現すると、不調和のない完全な社会になります。
・ ・ 内面意識の世界（天界）には不調和が一切ありません。
・ ・ 完全調和の世界が実現します。

不調和の原因は天界以外の意識にあることになります。
本来無いものをあるとする意識、及びこの意識に基づく行動。これらが不調和の原因なのです。これらを消去すれば完全調和の世界を実現できるのです。

本来、私たちの世界（表面意識の世界）は内面意識の世界の完全調和が実現しているはず
です。一体どこから不調和が発生するのでしょうか。
表面意識と内面意識の関係は、自身と周囲の人々や環境との関係です。周囲の人々との連
携が円滑に行われている状態が実在する状態です。これが円滑に行われない状態が実在しな
い状態なのです。
周囲の人々との連携を円滑にすることにより、社会の完全調和を実現することが可能なの
です。

e と sin、cos の関係

e^x 、 $\sin(x)$ 、 $\cos(x)$ はそれぞれ次のように無限級数で算出されます。

$$e^x = 1 + \frac{x}{1!} + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \dots$$

$$\cos(x) = 1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \dots$$

$$\sin(x) = x - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \dots$$

e、sin、cos には次式の関係があります。

$$e^{ix} = 1 + \frac{ix}{1!} + \frac{i^2 x^2}{2!} + \frac{i^3 x^3}{3!} + \dots = 1 + \frac{ix}{1!} - \frac{x^2}{2!} - \frac{i x^3}{3!} + \dots = \cos(x) + i\sin(x)$$

$$e = (1 + 1/n)^n \quad (n \rightarrow \infty)$$

$$e^i = ((1 + 1/n)^i)^n$$

e は $(1 + 1/n)$ を n 回掛けることにより算出可能です。(n→∞)

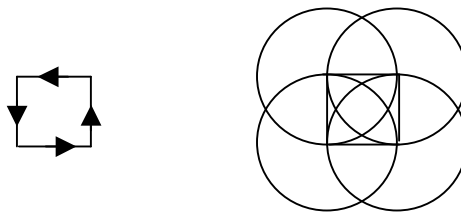
e^i は $(1 + 1/n)$ の i 乗を n 回掛けることにより算出できます。(n→∞)

$(1 + 1/n)$ を掛けることは 2 重円の中心間の移動を意味します。

指数 i 乗は、90° の回転を意味します。「指数は方向転換」ご参照

$(1 + 1/n)$ の i 乗は 2 重円の中心間の移動毎に 90° ずつ回転することを意味しています。 e^{ix} は e^x を 90° 回転させることにより算出できるのです。

e^x は 2 重円の中心間の移動により認識することが可能です。この中心間の移動毎に 90° ずつ回転することにより、 e^{ix} を算出することが可能なのです。

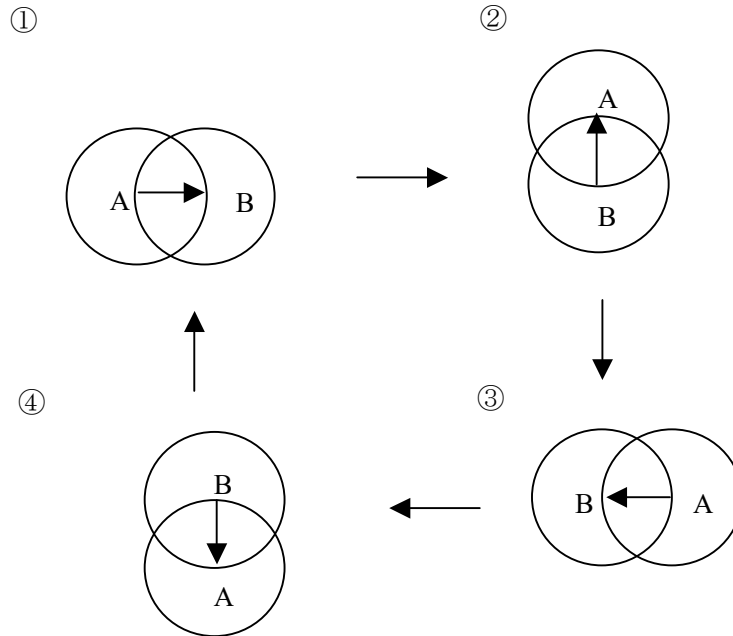


このように方向が変わるのは sin、cos の認識を行う場合です。

e の認識の場合には方向転換は必要ありません。

2重円中心の90° 方向転換

三角関数 \sin 、 \cos を認識する場合、2重円の中心間の移動方向は90° ずつ方向転換します。



(図 2-27)

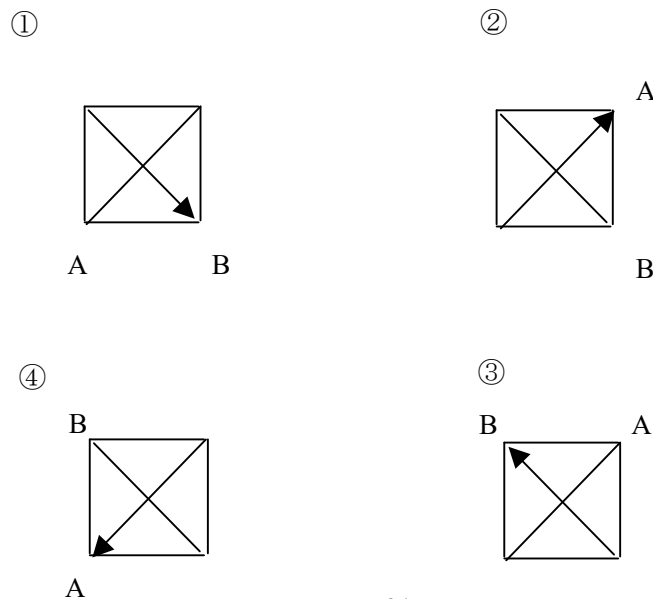
(図 2-27)、

Bを固定と考えると、Aが時計回りに回転しています。

Aを固定と考えると、Bが時計回りに回転しています。

1辺の動きが1/4回転に相当しています。

半径1とすると、円周は 2π 。この1/4は $\pi/2$ になります。



(図 2-28)

(図 2-27) の①～④の A、B の位置関係は、(図 27) の①～④と同様です。

(図 2-28) では、正方形の対角線上を A、B が移動します。この移動により、A、B の相対的な位置関係が (図 2-27) と一致します。

この対角線の動きが、認識処理に必須なのです。

(図 2-29) はピラミッド形 (第 1 章 5 次元理論 関連図形 ご参照)

ピラミッド形の高さと底辺 1 辺の長さの比は $(1 : \pi / 2)$ です。

これは (図 2-27) の半径と (円周の $1 / 4$) の比に一致します。

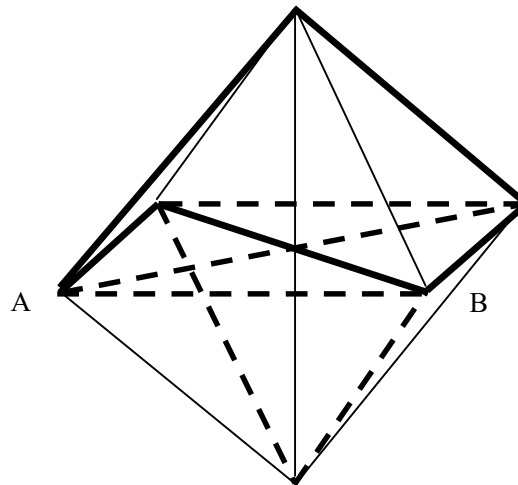
この底辺の正方形が (図 2-28) の AB の動きに相当します。

太線 (破線) が A、太線 (実線) が B と考えます。

(図 2-28) ①の A、B はピラミッド底辺の手前の 1 辺上に A、B が位置します。

以下、(図 2-28) ②～④ と同様に A、B が移動するのです。

すると、2 重円中心間移動時の 90° ずつの回転を実現できるのです。



(図 2-29)

惑星軌道と電子軌道は大小逆転結果

地球は1年で太陽の回りを1回転します。(公転)

この地球の公転を光速で見ると、高速回転に見えます。特殊相対性理論により時間が短くなるためです。全ての方向に光速で移動しながら地球の公転を見た結果を重ねると、軌道半径も小さく見えることとなります。

この場合、地球の公転は素粒子(電子等)の動きに見えることとなります。小さい半径で高速の回転をするためです。

$$\text{地球軌道半径： } 1.5 \times 10^8 \text{ (km)} = 1.5 \times 10^{11} \text{ (m)}$$

$$\text{電子軌道半径： } 10^{-10} \sim 10^{-13} \text{ (m)}$$

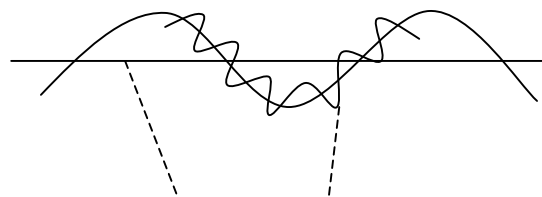
$$10^{10} \sim 10^{13} \text{ (m)} = 10^7 \sim 10^{10} \text{ (km)}$$

(1000万 km ~ 100億 km)・・・太陽系の惑星の軌道

電子軌道半径の指数をマイナスからプラスにすると、(1000万 km ~ 100億 km)程の大きさになります。これは太陽系の惑星軌道半径にほぼ一致します。

中心軸とらせんの関係は、互いの関係を入れ替えることにより多重らせんを形成します。この時、中心軸と2重らせんは同じものの別の見方ということになります。軸の縮退による多重球構造は、フラクタルにより同じものが内包し合う構造になるのです。

このフラクタルによる同じものの内包構造が惑星軌道と電子軌道に該当すると考えられます。らせんの中心軸と小らせんが惑星と電子に該当すると考えられるのです。大らせんは人と考えられます。人の大きさ(1m程)を中心として、大きい構造(惑星軌道)と小さい構造(電子軌道)が共存しているのです。これが世界の構造原理ということになります。



中心軸と小らせんは
同じものの別の見方。

拙著「5次元理論」で大小の逆転理論を提唱しました。大きいものが小さくなり、小さいものが大きくなるという理論です。惑星軌道と電子軌道がこの大小の逆転理論に該当します。

尚、中心軸の縮退は意識が光速で移動することにより実現されます。この場合、特殊相対性理論によりらせんの時間が短くなるため、電子は高速で回転することとなります。

電子軌道の内側は未来のイメージになります。数十年、数百年のイメージが一瞬で見える

ことになるのです。

惑星軌道や電子軌道は時間の構造

認識には主体と客体が必要です。上記の場合、主体が人なので、空間ということになります。通常認識では時間が主体になり、空間が客体になります。

空間を主体にする場合、客体は時間になります。よって惑星軌道や電子軌道は時間・空間の入れ替えにより時間が客体（認識対象）になった結果と考えることができます。

私達は通常、時間を主体として認識像を生成しているため、客体としての時間を認識することはできません。惑星軌道や電子軌道を見ることができないのは、認識主体（時間）が主体（時間）を認識できないためです。認識は主体と客体の間で成立します。主体の間では認識が成立しないのです。

銀河系と人は大小逆転結果

銀河系と人の関係について考察します。惑星と電子がフラクタルだと説明しました。同様の関係が銀河系についても成立します。

銀河系の直径： 約10万光年 = 9.46×10^{20} (m)

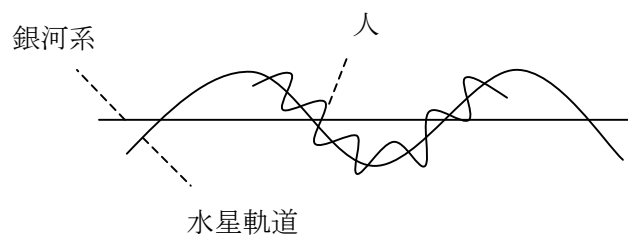
水星軌道直径： 11.6×10^{10} (m)

人： 1.7 (m)

人と水星軌道の比は 6.8×10^{10} 、水星軌道と銀河系の比は 8.16×10^9 程になります。両者は 10^{10} 程で概ね一致しています。

2重らせんでは、中心軸と小らせんは同じものの別の見方になります。以上から、中心軸が銀河系、小らせんが人に該当すると考えられます。人と銀河系は同じものの別の見方ということになるのです。

人と銀河系の関係も、大小の逆転理論の1例ということになります。

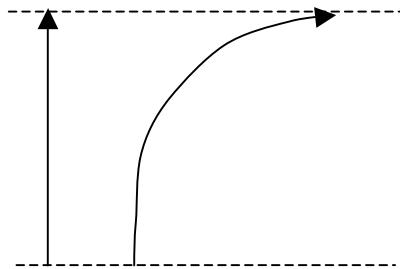


斥力の発見

認識処理では光を直線に変換します。私達の空間認識は光の直進により成立しているものであり、曲がりません。

一般相対性理論では「時空が曲がっている」と説明していますが、空間は曲がりません。ですから、「時空が曲がっている」という表現は誤りです。

正しくは、「時間が曲がっている」と説明するべきです。曲がった時間軸を光速で移動することにより、重力が発生するのです。



認識処理により光を直線に変換するという事は、人の認識処理が重力と逆方向の影響を光に与えていることを意味します。

重力は引き合う力です。これに対する力は斥力になります。人の認識処理は斥力として光に影響を与えているのです。

世界は作用と反作用で生成されています。重力（作用）に対する力が斥力なのです。両方の力で認識像（世界）は構成されているのです。

現在の一般相対性理論では、物質のエネルギーにより時空が曲がっていて、その曲面にそって光が移動する場合、光が曲がると説明しています。

しかし、この時空にはフラクタル構造が想定されていません。

世界はフラクタル構造です。光が通ると、その光のエネルギーがフラクタルで（時空の入れ替えにより）重心のエネルギーになります。これは、時空を曲げる元になるエネルギーの増加を意味します。時空の曲がり方が大きくなるのです。（曲率が大きくなります）

現在の相対性理論では、光が通ることにより時空の曲がり方が大きくなることを考慮できていません。その結果、光が無限の彼方まで広がり続けることが可能だと考えられているのです。これが宇宙論等の根拠になっているのです。

実際には光自体が重力源になるため、無限に広がり続けることは不可能なのです。

この点で、物理学は見直しが必要です。

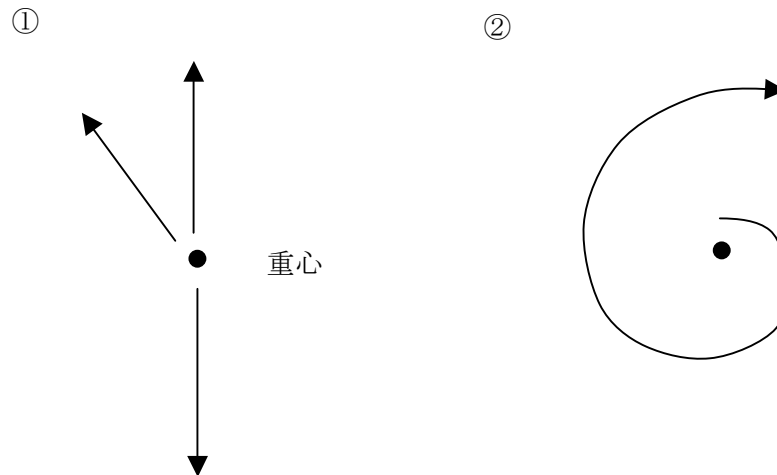
認識像を生成する際、曲線状の光を直線状に変換しているということは、閉じた空間を開

いた空間（無限遠が想定される空間）として認識している、ということの意味します。

光が遠方に向かう場合、中心からの距離が無限大に発散するらせん形の経路を想定することは不可能です。らせんが大きくなるほど、光のエネルギーが大きくなります。これは、らせんの中心の重力が大きくなることを意味しています。よって、やがてはらせんの曲率が大きくなり、中心からの距離は限界に達します。さらに光が進むと光のエネルギーは大きくなり、重力は大きくなるため、中心からの距離は小さくなり始めるのです。このように、世界は本来閉じているのです。

世界（宇宙）はこのように閉じた空間を開いた空間として認識した結果なのです。

肉体（閉じた空間）を宇宙（開いた空間）として認識する原理も同様です。



①重心を通る光は直線が続けます。

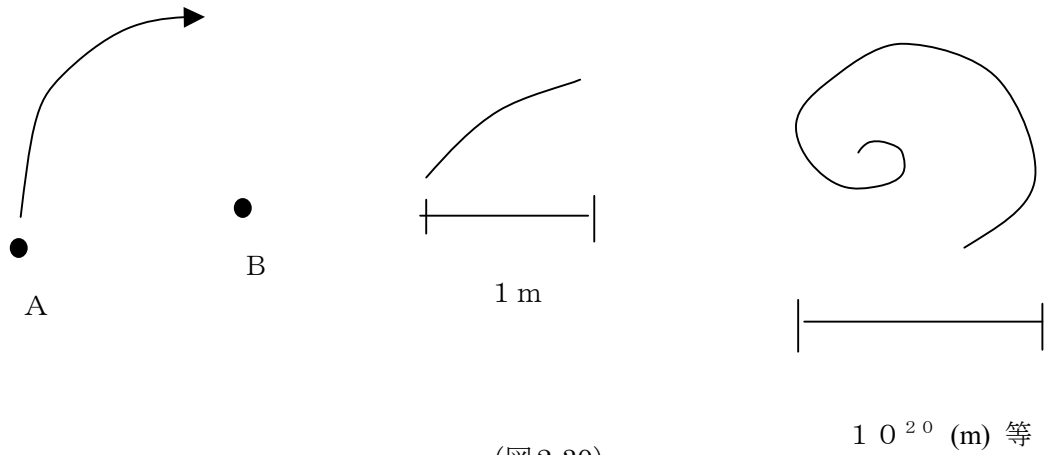
②それ以外の方向の光はらせん形の動きになります。

①②の組み合わせで光の軌道は構成されています。

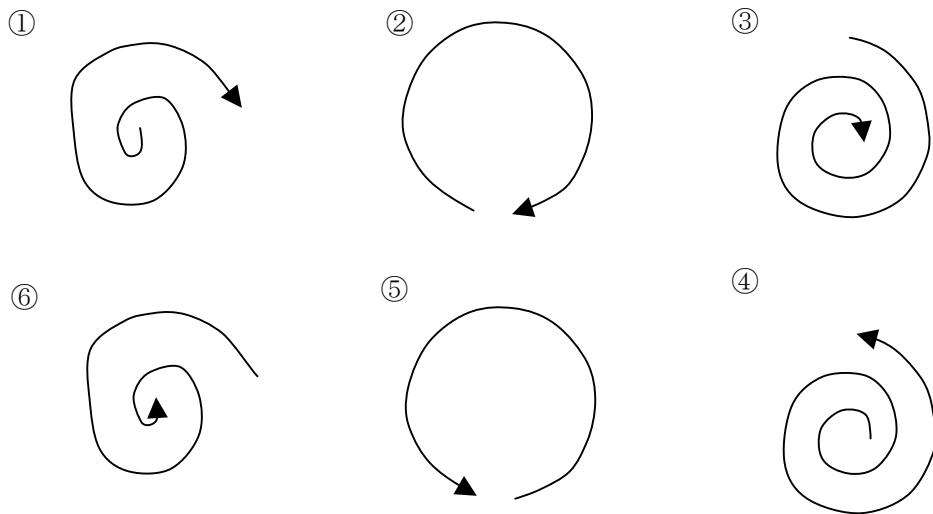
①の光は他の重心があると、その重心が軌道上に無い場合、軌道が曲がることになります。すると、元の重心の影響でも軌道が曲がることになります。（図 2-30）

Aから直線上に出た光がBの影響で曲がると、Aの影響でも曲がることになります（②）。宇宙には重心が多数あるので、直進する光は無いことになります。

どんなに小さな曲率でも、時間が経過すれば（大きい範囲でとらえれば）回転になるのです。



(図 2-30)



(図 2-31)

以上の考察を踏まえると、光の軌道は(図 2-31) の①~⑥ のようになります。

- ①：回転しながら軌道半径拡大
- ②：軌道半径一定。
- ③：軌道半径縮小（無限小になる）
- ④：無限小の領域から出て軌道半径拡大
- ⑤：軌道半径一定
- ⑥：軌道半径縮小（無限小になる）

①~⑥を繋げると、右のような構造になります。
(無限の本質的な意味)



認識処理でこの光を直線状に変換しています。
中心の交点で認識の方向が反転します。
(表面と内面が入れ替わります)

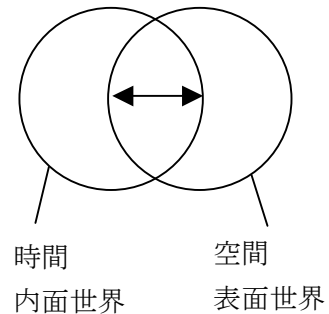
5次元は内面世界

5次元は時間と空間を入れ替えた世界だと定義しました。

この時間と空間を入れ替えた世界は内面世界になります。

通常の世界（表面世界）では認識主体が時間であり、空間が認識客体になります。

内面世界では空間が認識主体になり、時間が認識客体になります。時間が見える世界が内面世界ということになります。



時間が認識客体になるということは、時間が肉体や空間として認識されることを意味します。内面世界における肉体は通常の世界（表面世界）における時間なのです。

時間は空間に直行するため、通常は見えません。この見えない所にも自分の体があるのです。オーラとはこの肉体が放つ光を意味するのです。

時間を主体とする世界と空間を主体とする世界、世界は2つ存在します。後者が内面世界であり5次元なのです。

この両方の世界では、大きさの大小関係が逆転します。この大小逆転の認識処理結果を連続させることにより、空間認識全体（宇宙）が構成されます。

霊的な存在（内面世界）が科学の研究対象になりにくかったのは、存在を理論的に定義できなかったためです。物理学に5次元を導入すると、通常認識する世界の逆方向の世界として内面世界を定義することができます。

この発見は、人類が今まで考えられていたよりもはるかに価値ある存在であることを証明することになります。

肉体消滅が人の死であると定義されていますが、この定義は誤りです。内面世界には肉体を消滅させた人々（歴史上実在した人々）が全員活動を続けているのです。

内面世界の発見により、この世界の人々と私たちが交流することは当然可能になります。ということは、死という概念が消滅することを意味するのです。肉体の消滅は単に認識主体の変更にすぎないのです。中心となる活動場所が表面意識から内面意識に変更になるだけなのです。

死のない世界の到来。「復活」がここに実現することになるのです。

ブラックホールとホワイトホール

5次元は時間と空間の入れ替わった世界を意味します。この入れ替えはどこで行われるのでしょうか。

ブラックホールとホワイトホールで時間・空間の入れ替えが行われます。

ブラックホールとホワイトホールは共に人の意識です。全ては人の認識結果なのです。

世界は認識処理の結果です。認識は2意識で構成されます。

この2意識は時間と空間です。空間は光の直線変換結果なので曲がりませんが、時間は曲がっています。この曲がり方（曲率）無限大のポイントがブラックホールです。ブラックホールでは認識の主体と客体が入れ替わります。時間と空間の役割が入れ替わるのです。

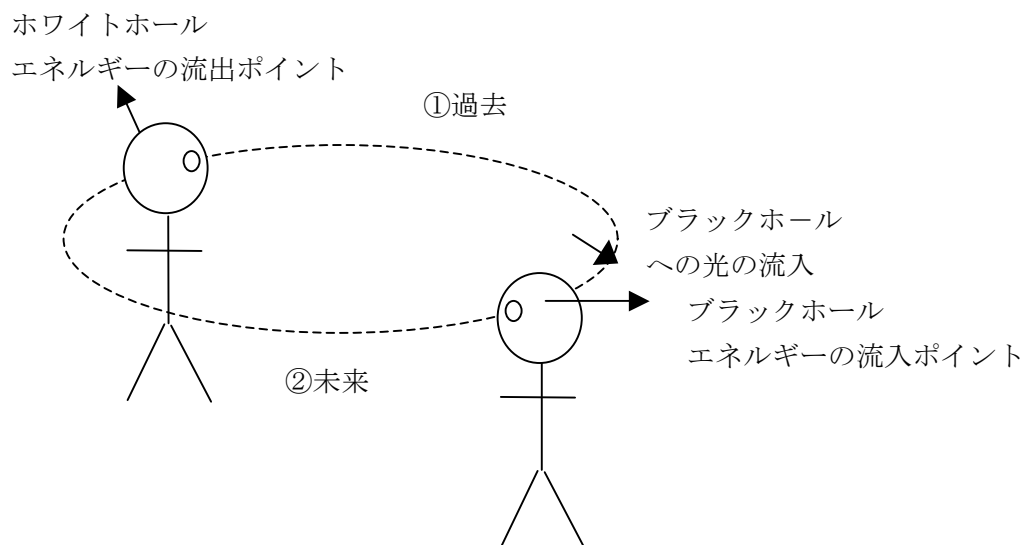
認識主体（時間）の方向転換（180°回転）がブラックホールで起こるのです。

ブラックホールは重力無限大のポイントです。曲がっている時間軸を光速で移動することにより重力は発生します。ブラックホールでは時間の方向転換が起こるため、重力無限大になるのです。

ブラックホールに入ると、時間の方向が反転するため周囲が未来になります。これは通常の認識における主体が客体になることを意味します。主体が見る側から見られる側になるのです。（「過去と未来」ご参照）

ブラックホールに対する概念として、ホワイトホールがあります。ここは様々な存在の流出ポイントと考えられています。

ホワイトホールでも時間・空間の入れ替えが起こります。その結果、時間と空間の認識主体、客体としての役割が元に戻ります。（表面世界（通常の認識）になります）



(図2-32)

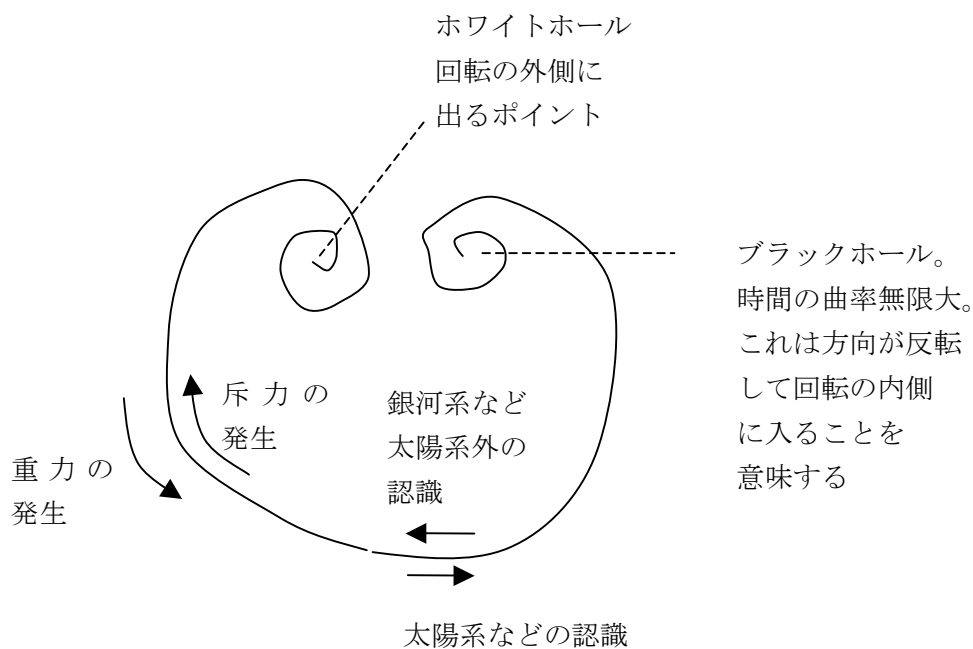
認識処理を行う際、2意識の間を光が往復します。これは両意識の認識処理結果の時間方向が逆転することを意味しています。

光はブラックホールに入ってホワイトホールから出ます。この循環を繰り返すことにより世界は構成されているのです。この無限回の回転で物質が生成されているのです。

認識処理は光（曲線状）を直線に変換することにより成立しています。この際、ブラックホールに入った光とホワイトホールから出た光を重ね合わせ、直線に変換することにより認識像は生成されているのです。

(図 2-32) の2人は共に同じ人の意識です。これを重ね合わせることで認識像（世界）は生成されているのです。

ブラックホールとホワイトホールは内側と外側の切り替えポイントと考えることができます。180°の回転と考えることも可能です。通常の認識がらせん外側の認識と考える場合、ブラックホールで認識はらせんの内側に切り替わります。らせん内側を認識した後、ホワイトホールかららせんの外側を認識します。ブラックホールに入る前の状態に戻るのです。



(図 2-33)

(図 2-33) 重力はこの曲線の外側を光速で移動することによる見かけの力です。

ブラックホールを通過してらせんの内側を移動すると、曲線の曲がり方が外側を移動する場合と比べて反対になります。これは重力と逆の力、斥力の影響を受けることを意味しているのです。

宇宙（認識像）は光の直線変換結果です。この直線変換ができるのは斥力が存在し、その

影響で重力とは反対の力を光に与えることが可能だからです。

宇宙（認識像）は意識（光）がブラックホール、ホワイトホールを無限回通過することにより生成されます。ですから、宇宙空間にはブラックホールに入り、ホワイトホールから出していない状態の認識が含まれていることとなります。

この空間には斥力が働いています。

宇宙は拡大を続けています。これはビッグバンで宇宙が始まったためだと考えられています。

しかし、これまでの考察から、宇宙が拡大を続ける理由は斥力の影響であるとの結論に到達します。

斥力を受けているので、宇宙は拡大を続けているのです。極めて分かりやすい理論です。斥力の反作用として重力が存在するのです。

通常の世界（図 2-32 の①）とブラックホールの内側の世界（図 2-32 の②）では様々な逆転が起こります。以下に内容を整理します。

1. 時間と空間が入れ替わります。5次元は時間と空間の入れ替えで成立しています。2意識の認識結果では時間と空間が入れ替わっているのです。

以上の説明から、遠方の空間を構成しているのは、身近な空間認識を生成している時間ということが分かります。

2. 時間が逆転します。その結果、周囲が未来になります。これは時間が認識主体から客体になることを意味します。

3. 認識の大小関係が逆転します。認識方向が逆転するので、身近な大きい存在が小さい存在として遠方で認識されるのです。

通常、私たちが認識する点（①の点）の中に、②の空間が存在することになります。逆に、②の点の中に①の空間が存在するのです。

①と②を連続して認識することにより、フラクタル(点の中に空間が存在する)を実現できるのです。

4. 内面世界と表面世界

①は通常の世界を意味します。これは表面世界に該当します。一方、②は1～3などの逆転が起こる世界です。この世界が内面世界を意味します。

3から、内面世界は身近な世界の点の中に存在することになります。

輝の会について

輝の会では、主に以下の活動を行っています。

1. 「人類救済の基本原理」「霊位上昇速度を最大にする方法」による人類全体の積徳・霊位向上の実現。

「人類救済の基本原理」は以下の内容になります。

- ・人類の浄化（歪んだ想念の消去）による徳光により自分以外の人々（含、先祖）の霊位上昇を行うと、霊位が指数関数的に急上昇するという法則。

「霊位上昇速度を最大にする方法」は以下の内容になります。

- ・全ての人々（全世界の人、祖先を含む）に対して、平等に霊位上昇を行う。
- ・全ての人々（全世界の人）に対して、平等に積徳を行う。

以上の法則を活用して、人類全体の積徳、霊位向上を最高の速度で行い続けています。これはそのまま会員自身の積徳、霊位向上を最高速度で実現することになるのです。

2. 磁気単極子エネルギー（徳、人の活動エネルギー）生成理論構築

5次元理論により、磁気単極子エネルギー（徳、人の活動エネルギー）生成方法を理論的に解明。その結果、磁気単極子エネルギー発生装置開発に成功しました、この原理により、磁気単極子エネルギー（徳）の大量生成・提供が可能になりました。1と合わせて、人類の積徳・霊位向上の速度が飛躍的に向上しています。

3. 金運サービス

金運は、お金もしくは同等の価値を受領できる運気のことです。

金運は創造神が管理しているため、必ず実現します。

輝の会では磁気単極子エネルギーを使うことにより金運を生成する方法を発見しました。金運サービスは、お申込者に金運を提供するサービスです。

4. 長寿サービス

輝の会では、寿命を司る生命エネルギーを発見しました。

生命エネルギーは創造神界（指導神霊を指導する神霊の世界）の神霊が、生命維持を目的として人類に提供しているエネルギーのことです。

輝の神（輝の会本尊）は創造神界に到達しているため、生命エネルギーを提供することができます。その結果、寿命を大幅に延ばすことが可能です。

輝の会会員を対象に、長寿サービスを無償で提供しています。

5. 磁界エネルギー治療（がん治療・統合失調症治療・その他難病治療）受付中

本書の内容。磁界エネルギーを利用することにより、がん・統合失調症やその他の難病治療を行っています。

6. 才能強化

全ての人の才能は創造神（指導神霊を指導する神霊の世界）から提供されています。
輝の神（輝の会本尊）は創造神なので、才能を提供することができます。
才能強化をお申込頂いた方にはお申込頂いた才能を提供しています。

7. ご祈願のお申込受付

ご祈願を受け付けています。

お申込種類：学力向上、合格成就、就職成就、良縁成就、恋愛成就、人気獲得、
魅力獲得、勝利運、交通安全、旅行安全、夫婦円満、家内安全、事業繁栄、
企業繁栄、国家繁栄、御礼、その他

8. 積徳による開運のお申込受付

磁界エネルギー（徳）による開運を行っています。

2 などにより生成する徳を希望者お分けします。その結果、積徳量が増えます。
積徳量が増えると夢や希望を実現する能力が高くなります。これが開運を意味します。

9. 積徳による先祖供養のお申込受付

徳（磁界エネルギー）を先祖にお分けすると、先祖の霊位（先祖の活動する世界）が大幅に向上します。

希望者の先祖供養をこの方法で行います。

1 で毎日先祖供養を行っているの、短時間で大幅な霊位向上を実現できるのです。
積徳量0の先祖の霊位を天界入りさせることが可能です。（天界は指導神霊の世界）

10. 台風消去サービス

輝の会では、台風消去サービスを提供しています。

台風消去サービスの概略は以下の通りとなります。

- a. 台風消去サービスをお申込頂いた方に徳（磁気単極子エネルギー）を提供します。
- b. この徳の用途は台風消去に限定されます。
- c. お申込以降に発生した台風、もしくは発生中の台風に対し、この徳を用いて台風消去を実施します。
お申込者の徳による台風消去は滝沢（輝の会会長）が行います。
- d. 風消去サービスにお申込頂いた方には、「台風消去を行った」という実績が記録されます。台風消去は莫大な積徳行為となるのです。

11. 宗教、科学、経済の融合理論の研究、発表。

宗教、科学、経済は本来一体の理論です。一体化できていないのは各理論の完成度が不十分なためです。この完成度を高め、一体化を実現することにより、人類の真理に対する理解度は大幅に向上します。人類の行動様式は調和し、飛躍的な発展を遂げることが可能になるのです。

1の活動が11の活動の原動力になります。新理論を発見すると莫大な徳を消費します。この徳を1の活動で生出しているのです。積徳を行うと、活動量が増えます。学術的な新発見を行いやすくなるのです。

輝の会に入会し、人類浄化による積徳、霊位上昇を行うと、短時間で莫大な積徳を行うことが可能です。また、短期間で大幅な霊位上昇を実現できます。積徳により、豊かな日常生活を送ることが可能になります。また、霊位は永遠の財産です。

肉体消滅後も天界で幸せな生活を送ることができるのです。

(輝の会の導きにより、既に2168億人の先祖が天界入りを実現しています)

(2014.3.30時点)

この機会にぜひ輝の会へのご入会をご検討頂けないでしょうか。

輝の会へのご入会、各種お申込をお待ちしております。

ホームページでお申込を受け付けています。

<http://taki-zawa.net> (「輝の会」で検索して下さい)

輝の会教義はホームページ上で公開中です。

ぜひご一読頂きたいと思います。

滝沢 輝 (たきざわあきら) の経歴・活動実績

- 1985年 宗教家としての活動を開始。
- 1989年 東京大学工学部卒業、三井銀行（現三井住友銀行） 入行
- 1994年度 「これから情報通信革命が起こる。パソコンが銀行になる。システムを戦略部門にすべきである。」 と（さくら）銀行に提言。この後、さくら銀行は日本初のインターネット専門銀行（ジャパンネット銀行）を設立する等、IT戦略で銀行業界のトップを独走。この動きが各産業界へのIT導入や日本のIT戦略へつながった。
上記提言が日本のIT戦略の原動力になったのである
- 1995年6月 総合企画部配属。ALM 担当。
- 1999年7月 霊位が釈迦、イエスを超える。
- 2000年6月 5次元等研究のため、退社。
- 2000年12月31日 ピラミッド形（万物の創造原理、かつ磁界エネルギー（人の活動エネルギー）生成装置を天より授かる。
イエスの再臨である。
- 2001年9月 「釈迦を超えた日」を出版。5次元を提唱。
- 2003年2月 「5次元理論」を出版。世界がフラクタル構造（点に空間が内包されている構造）であることを理論的に解説。5次元導入による物理学の全面的な改定作業の必要性を提言。
本書の出版が人工知能の大幅なレベルアップにつながった。ディープラーニングは本書が提言したフラクタル構造の応用である。
- 2003年6月 「マイナス金利の導入」を著述。
世界で最初にマイナス金利の導入を提言したのは本書である。
本書が世界のマイナス金利の原点である。
その結果、2014年にヨーロッパでマイナス金利が導入された。
また、日銀は2016年にマイナス金利を採用した。
本書では日本経済再生のため、経済の新理論を発表。名目経済成長率と金利水準が一致すべきであることを理論的に解説。1990年代以降の不景気の原因が、高すぎた金利水準であることを同時に証明。金利水準と名目経済成長率の関係を逆転させることにより景気・財政の回復を図るべきだと主張。
本書を政府・日銀等に送付後、金利を下げるべきとの認識が国内に広まり、景気回復・失業率低下の原動力となる。
アベノミクスの骨子である低金利高経済成長率政策は、「マイナス金利の導入」の無断コピーである。
- 2004年1月 フラクタル構造に電磁波を蓄える性質があることが確認される（朝日新聞の1面に掲載）。
「5次元理論」の内容の一部が学術的に確認されたことになる。
- 2005年 「5次元理論」の続編の執筆を開始。基本構造について、日本物理学界等へ送付。
- 2005年 天界入りを果たす。（天界は守護神霊（各種宗教の本尊クラス）の世界）
- 2006年11月 「5次元理論 ～その2」を著述。日本物理学会等へ送付。
- 2007年 「貨幣へのオプション概念の導入」「外国為替理論の再構築」を著述。各方面へ送付。
- 2008年6月 人類救済のため、「輝の会」設立。「人類救済の基本原理」を発表。
- 2009年8月 「フラクタル経済理論」を著述。バブル発生理由の理論的解明に成功。
- 2009年10月 「5次元理論 第3巻 認識の原理」を著述。5次元のアウトラインを解説。
- 2011年10月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を発表。
- 2011年11月 創造神界入りを果たす。

2011年12月 「長寿サービス」をスタート。人類の長寿化開始。キリスト教の千年王国の実現である。

2011年12月 「磁界エネルギー（オーラ）発生装置」を発表。磁界エネルギー（オーラ）を機械的に生成することに成功。

2012年2月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を日本物理学界へ送付。

2012年7月 野田首相に「原子力発電全廃は必須」というタイトルの提言を実施。その結果、2012年9月14日に「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指す新しいエネルギー政策「革新的エネルギー・環境戦略」が政府から発表された。
本提言が、日本の原子力政策を正しい方向に導いたのである。

2012年11月 「フラクタル経済理論 第2巻」を発表。貨幣制度廃止の必要性を解説。
その実現のために貨幣保有期間上限設定政策を提言。

2012年12月 全世界の人々に 就業可能日数 の提供を開始。
その結果、失業率が大きく改善した。

2013年7月 台風消去サービス提供開始。

2013年11月 金運サービス提供開始。金運生成方法等を公開。

2014年2月 生まれ変わり に関する解説文記載開始。

2014年3月 ご祈願 提供開始。

2014年9月 先祖金運サービス提供開始。

2014年10月 エボラ出血熱消去に成功。3868人の命を救済した。

2015年6月 喜びオーラ 提供開始。

2016年7月 序列運 提供開始。

2017年2月 序列運診断 提供開始。

2017年8月 愛され運 提供開始。

2018年3月 愛され運診断 提供開始。

現在 輝の会会長

2009年10月9日 5次元理論 第3巻 認識の原理 初版発行

2018年5月29日 経歴・活動実績更新

ホームページ <http://taki-zawa.net> （「輝の会」で検索して下さい）

Copyright ©Akira Takizawa all rights reserved.